

昨年の史學・考古學・地理學界

史學一般

昨年は史學關係學會の機關雜誌が陸續して創刊され史淵(九大史學會)、史學研究(廣島文理科大學廣島史學研究會)國史學(國學院大學國史學會)、經濟史研究(經濟史研究會)等擧げ來れば吾々の意を強うするものがあつた。本欄に屬する著書として先づ「史學概論」(野々村戒三著)は原理論、方法學の二編から成り前編は史學の概念、歴史認識、歴史の分類史觀の變遷後編は總說史料學、史料の批判、綜合、表現に分れ、更に「史學に對する疑義」以下五項が附記されてある。全體を通じて特に新奇のものはないが簡明平易好個の述作として推奨するに憚らぬ。「轉形期の歴史學」(羽仁五郎著)は一昨年來史學雜誌其他に發表した論文を採録したものであつて一部は昨年の本欄に紹介して置いた、本書の中「歴史學の方向及方向轉換」に於て十九世紀の歴史學の諸傾向即ロマンチ

ックのそれ、批判的文獻的のそれ、實證的のそれ等は唯、ブルジョアの歴史學として初めて理解さるべきであるとし、近代歴史學は他の生産諸力と同様、ブルジョアの造り出したものであるが彼等は今や生産諸力を統御し得ない如く學問をも統御し得ない、彼等の手に育てられた近代歴史學は彼等の手を離れて正に反對に彼等を批判せんとするに到つた、そして近代歴史學の方向轉換に關し檢討を試みてゐる。「歴史哲學概論」(ヘーゲル著、河野正通譯)はヘーゲルの世界史哲學第一卷——歴史に於ける理性、世界史哲學緒論——の翻譯であつて彼の歴史哲學を知らんにするものに恰好の手引をなす。「史的觀念論の諸問題」(三木清著)は思想其他の雜誌に記載した論文を採録したもので批判哲學、歴史哲學、歴史的因果律の問題、個性の問題、デルタイの解釋學ヘーゲルの歴史哲學等の問題を

含むそのうち最後のものに就ては次に掲げる。

雑誌や叢書に出た論文では「歴史に於ける比較攻究の問題」(今井登喜志、史學雜誌)は近代史學が歸納的推理を行ひ個々の歴史現象からそれらに共通する特色を見出し普遍的認識に到達する場合、其の行き方は自然科学と同様であつても後者は法則的規則的であるに反し前者は特殊性一回性が特質をなすから其認識は個性的である、究極に於て自然科学は普遍的のものに到達するが史學は個性的一回的のもの遂に最歴史的のものを認識する手段とする、こゝに歴史の比較研究の任務がある、歴史の素材は無限に豊富であるがそのうちの或るものに着眼し、比較により既知の關係から未知又は不明瞭な關係を探し出し對象の個性を明にするが比較研究の意義であると言き、「歴史の矛盾性」(津田左右吉、史苑)は未來に向て進む生活が過去になつた時、即生活が生活でなくなつた時それが歴史の領域に入る、しかし歴史の取扱ふものは生活でなければならぬ、こゝに矛盾があり問題を生ずるこゝし、歴史の任務は第一過去の生治を生活として叙述し描寫する

こゝに第二過去の生活の過程を反省し、そうした過程を開展させた理路、事件、思潮などの意義を考察するこゝであると言き前第一を採れば自由の世界を望んで前進しうるが第二を採れば絶えず必然の世界を反省するにいたる、歴史家が以上二つの任務を併せ負ふ時互に衝突し相妨けるものがありはせぬか、と疑ひ、更に過去の生活から開展したものが現在であるから現在のうちに過去も生きてゐる、從て指導原理も現在の生活そのものから生れ出づべきである事、その調和點を見出してゐる。「世界思潮」(阿部次郎岩波講座世界思潮)は世界思潮とは何ぞいふ問題にその一般的解答を與へんしたもの、其準備として先歴史的認識、歴史世界の構造、時代等に就て考察を試み、そして世界史とは歴史の主體たるべき生命單位のうち最包括的な單位、人類の遭遇せる個性的事實の發展的聯關を認識せんとする學あらゆる作用聯關の最後の綜合として諸種の民族史、國民史、文化史を貫流するものを全人類の見地から統一的に把握せんとする學とし世界思潮とは世界史的進行をなす人類生活の中から産れ出て其の

世界史的進行に參與する思想を一つの生命單位と見、人類の思想を綜合的統一的に發展するものとして理解せんとする試であつて思想の發展を視點とする世界史そのものに外ならぬと論斷し、「郷土史研究と其の教育」(西田直二郎自然科學地理研究號)では近來郷土史研究の盛になつた原因は一般社會生活の要求と各種學問研究の發展にある、後者に於ては歴史學の進歩殊に文化研究の唱道に關係が深い、文化史は歴史研究の領域を擴大し又人間生活の諸方面が如何にして人間性の表現として理解されるべきかを反省せしめる點に意義を有するのであつて郷土史研究もこゝで文化史の研究と密接に關聯する、只對象の擴大によつて郷土史が歴史研究の視野に入るこゝいふだけでなく其の史實が中央と關係あるなしに係らず人間生活の表現として人間性の理解に如何なる意義あるかを考ふるこゝにより地方史が初めて独自の立場を占める、地方に於ける些細な事象も思はれるこゝでもそれが人間性の示現として見られる時、其價値の上から即國民史であり、世界史である、郷土史の教育も同様に郷土史教育即國民

史教育、世界史教育でなければならぬ、そしてこの意味の郷土史教育には無論教育者其人を得なければならぬが先國民史世界史全體の知識を必要とするに叙べ、「西洋史研究の使命」(新見吉治史學研究)は先づ史學の使命は應用にあるとし、この意味で本邦に於ける西洋史研究は知見を廣める上に特に重大であり更に修史に於ても國史家東洋史家は西洋の史學に學ぶこゝろがなければならぬが特に西洋史研究家は東西の歴史を比較研究するために國史東洋史の研究に意を用ひるを要する、かくして日本人独自の立場から歴史の法則に關する研究を試み又は人類史世界史の編み直しをやる、これが日本に於ける西洋史家の使命であるとし、「ヘーゲルの史的辨證法に就いて」(河野正通、思想)はヘーゲルのいふ理性は即ち神にして彼の世界史の哲學は神の世界支配といふ宗教的信仰である、但彼の神は遍在的であり何人の中にも何人の自由意識にも現はれる、これが世界精神である、この精神は辨證法的に段階的發展をなす、それが世界史を構成する、従つて世界史は自由意識に於ける進歩である、其の段階の進行に

は遲速あつても順序には變りがない、世界史で取扱ふ精神の發展を表現する民族即ち世界史的民族の民族精神であらねばならぬ、各民族は其の精神的原理を實現すべき時間の到來を待ち世界史の發展段階に於て一度限り世界史的に支配的な民族となる、そして民族精神は特に藝術宗教哲學に特色を示し其時代を代表する民族精神の活動を見るがやがて其對立矛盾を生じ次いで他の原理が發生し世界史は次の段階に移るゝするが要するにヘーゲルの世界史の段階別時代別等は歴史的にあらず純論理的であるとしてゐる。「ヘーゲルの歴史哲學」(三木清同誌)ヘーゲルによれば理性が世界を支配する故に世界史も理性的に生起したとある、しかし哲學は「あるところのもの」を對象とし之は事實的歴史的でなく、イデーであり、理性的内容である、然るに歴史は即ち事實的歴史的でなければならぬから彼に於ては哲學其ものゝ歴史哲學とは違つた行き方をとる、ヘーゲル哲學の關係するものは事實にあらず當爲にあらずイデーであり、イデーは彼にあつては精神であり宇宙の一切に於て自己を啓示する、だから歴

史も其例外たるべきでなく寧ろ歴史こそイデーが自己を顯示する固有の領域である、斯うした見地からヘーゲルは啓蒙思想に對して歴史意識を確立したのであるがしかし之等の歴史意識はヘーゲルの立場に於て果して純粹に維持せられ得るか否かに關して検討を試みてゐる、「神話學の方法及概念」(羽仁五郎史學雜誌)は神話は他の人間の生産物同様自然及人間に對する人間の行動及びかゝる目的のための要具であるとし神話學は原始時代に存した神祕的奇異的觀念表象を記述類聚するのではなくして歴史社會に於けるあらゆる觀念形態が特定の觀念的生産又は生産的としての場合を研究する、換言すればあらゆる觀念形態の神祕的形成を其の發生の現實性との關係に於て研究することに神話學は成立するとし、「文化傳播の推定に關する一考察」(松村武雄同誌)は多數の國土民族間に類同した文化形相を解釋する方法中近來文化傳播説が擡頭し初め世界諸民族の文化は多くは埃及文化の傳播であるを唱へられるが傳播説により解釋せんとする場合の規準的原則として(一)文化形相の傳播證示力は該形相の

種類により異なる、(二)各々の文化形相の構成を分析し簡素な要素にするを要す(三)文化形相の類同の有無多少は傳播の有無多少を證するものでない、の三則を掲げそれら詳細な説明を加へてゐる。

尙外に「文化史に於ける美型概念の構造と形態」(小山榮三、社會學誌)「歴史法」(綿貫哲雄、同誌)「歴史教育の本質」(中川一男、歴史教育)「宗教現象の社會形態的説明」(田邊壽利宗教研究)「史觀としてのマルサス人口論」(吉田秀夫我等)等眞面目な研究室論文の少なからざることを附記しておく。〔菅原〕

國史 昭和四年の國史界が示したさまじくの傾向の中に稍著しかつたのは唯物史觀の進出である。羽仁五郎氏の「佐藤信淵に關する基礎的研究」も結局かゝる史觀に基くものであらう。服部之總氏の「明治維新史」には特にこの主張が強調されて居る。それは歴史を以て物的關係の基礎に立つものとし一面普遍的—或は公式的解釋に於て世界史を構成せんとするものである。これに對して顯著なる對照を示すものを我人は平泉澄氏の史觀に見る。

氏は「日本史上より觀たる明治維新」(明治維新史研究)に於て「歴史は實に人間精神最高の發現である」(三)し、なほ歴史の特性は「變化推移を通じて一貫する所の不易不滅の精神」がある(三)でありこの點より「眞に歴史と呼ぶに價ある所のものは日本歴史の外には存しない」(三)斷じ歴史に於ける精神の優越(三)國史の絶對尊嚴を説いて居る。

かゝる傾向は恐らく今後とも問題としてあらゆる歴史家の反省を要求するものであらう。次にあぐべきは國史の民俗學的研究の進展である、この年折口信夫氏は「古代研究民俗學篇第一」を出されて著しくこの學に對する人々の注意を喚起した。近年さみに高まり來れる民衆意識が民衆自體の生活中に深き人間性を發見し歴史の推移すべき窮極の原因も亦こゝに存することを思ふに至つてこの學は深く國史の分野に侵入し來つたのである。我々は今後に於けるこの方面の研究が大に展開されるべきを豫想して略誤りないであらう。この外さまじくなる傾向については以下それら觸れる所があらう。

●一般史 通史風のものには「平安時代史」(川上多助大

の研究」(吉村茂樹、歴史地理)は衛府の官人が大體文官的性質を有し警衛の實力を缺きしことが瀧口設置の原因にしてそれは中央に於ける武士の進出を意味し地方に於けるそれと共に注目すべき現象とした。

中世に關しては先づ故原勝郎博士の「日本中世史の研究」に敬意を表する。その右京大夫集に平家歿落の感懷を語らしむる等卷中ほのかに漂ふローマンチイックな空氣は正に博士の時代を示すものである。「中世文化の基調」(平泉澄史林)は例の國史の發展を價值觀の推移によつて把握する方法により中世を以て宗教的理念の支配せる時代とし他の時代に對比してその特色を明かにした。

この外「武家時代之研究三、源平時代二」(大森金五郎、單行)「後白河法皇」(中村直勝、國史と國文)「中世に於ける武士團結の一要諦」(田山信郎、歴史教育)がある。「北畠顯家の上奏文に就いて」(黑板勝美、歴史地理)は醍醐寺金剛王院實助が親房の弟なりし爲こゝにこの文書が残りしものにして七ヶ條の意見は顯家及彼を通じて親房の精神をよく見得るものとする。なほ「長慶天皇の皇胤について」

て「芝葛盛、史苑」がある。「堺市史」堺の黎明期より足利時代に至る間は三浦周行博士の執筆である。この港が中世より近世初頭へかけて國史上に有する意義の重要な爲にこれに關する研究は既に屢諸家の試るゝころであつた。博士亦早く思をこゝにひそめ研鑽既に年久しきものあり今その蘊蓄を傾けてこの研究を大成せられた。殊に斷片的なる古文書がそれを生んだ廣汎なる歴史的關係をいかなる程度に迄復原し得べきかの一の限界を示せる點が重要である。これに關聯して「黎明期の近世文化に於ける堺の地位」(同人、史苑)「堺と泰西文明」(同人、歴史と地理)「開國文化より見たる堺」(同人、開國文化)がある。

近世に入つては「近世の武士階級に關する一考察」(三浦周行、史學研究)「鐵砲の傳來に就いて」(長沼賢海、史淵)「毛利隆元の頓死とその墳墓」(瀨川秀雄、史學研究)「織田上杉兩氏の養子問題」(相田二郎、同誌)「上杉謙信卒去の病症」(高橋義彦、歴史地理)「徳川家康對明智光秀問題の解明」(柴謙太郎、同誌)「大町人搦頭の緣由」(同人

同誌)「武田勝頼滅亡以後の武田家」(渡邊世祐、同誌)「高松講和後の境界劃定」(同人、歴史教育)「石川伯耆守數正の岡崎脱走」(花見朔見、歴史地理)「江戸の成立」(渡邊世祐、地理と歴史)「松平正之公の勤王」(木村定三、史苑)等がある。大阪朝日新聞社は歴史的教養の大衆化を目的として三月四月の間開催した開國文化展覽會は併せてこれに關する講演會を開きそれを録して「開國文化」二冊を發行した。その中「開國文化の歴史的意義」(西田直二郎)は世界がいかにして日本を發見しいかにこれに働きかけたか又日本はそれに對していかなる反應を示し又いかに彼自身を反省し發展せしめたるかの問題を内面的意味に於ける世界史的關聯の中に理解せんとする試みとして國史の世界史的解釋の可能を證せる興味ある論文である。その他「東西交通史上より觀たる日本の開發」(桑原隲藏)「鎖國の得失」(辻善之助)「倭寇と南蠻」(長沼賢海)「海外交渉中心地としての長崎」(古賀十二郎)「遣歐青年使節と吉利支丹文化の移入」(新村出)「日英交通史概説」(武藤長藏)の諸篇を含む。この外「鎖國時代日英關係復興計畫」

(田保橋潔、歴史地理)「慶長の遣使支倉一行の跡を尋ねて」(板澤武雄史苑)「江戸時代初期トレンケン在住の日本人」(岩生成一、歴史地理)があり「高砂國の考察」(幣原坦史學雜誌)は臺灣語にてタカは竹を意味しタカサゴの名は蕃社を圍繞せる竹林を以て彼等部落の名とせる打鼓山といふ言葉に基くもの、この名を負へる蕃族は臺灣の西南岸に廣く占據せし爲遂にその地方名より同島の稱呼と偽りしといひ「臺灣といふ名稱の起源及び意義」(同人、史學研究)はこの名が蕃族名より出し考證である。「大名の研究」(中村孝也、三宅博士古稀祝賀記念論文集)は近世を支配せる形式主義に於て武家のそれは最も多く實際生活に接近しその奔放なる發揚を調節したが享保時代は特に兩者の最よく調和せる時代なりとしたるに反し「所謂享保中興の價値」(栗田元次、史學研究)は徳川幕府が武斷より文治に推移せしは政治進歩の順路に従ひたるものでありこの意味よりすれば享保中興は一種の反動に過ぎずして到底その目的を達し能はぬ運命にありたるものである。加之吉宗の功利政治は幕府存在の精神的基礎を崩

壞せしめた。幕末に關しては「文政打拂令に關する考察」(井野邊茂雄、史學雜誌)幕末に於ける通商政策の發展(同人、國史學)和宮の御降嫁に關する研究(同人、史苑)生野の義舉(下村三四吉、三宅博士記念論文集)鳥羽伏見の變(井野邊茂雄、歴史教育)がある。明治維新に關するものとしては先づ史學會編纂の「明治維新史研究」がありその内容は大家新進の論文集にして尾佐竹猛氏の如きは維新當初の理想は封建制度の上に立憲制を建設せんことを説く等極めて多方面のものを載せてゐる、徳富蘇峰氏亦「維新回天史の一面」を著した。氏の平生志す所を見るべきである。なほ「維新史に於ける吉田松陰先生の地位」(同人、藝文)「維新前後に於ける人權の發達」(綿貫哲雄、三宅博士記念論文集)がある。

明治時代も我々にまつては既に歴史時代となつた。その研究は漸次盛行の傾向にある。然しこゝでは「明治文化の特質」(徳重淺吉、歴史と地理)「明治時代文化史觀」(中村孝也、歴史教育)「第二次日本イギリス同盟條約と中アジア」(坪井九馬三、史學研究)の諸篇をあけるに止め

る。

法制史の方面では牧健二氏の日本法制史論朝廷法の卷第一が出たその大綱は日本法制史の時代を分ちて朝廷法時代と武家法時代の二つにこの見地に立ちて質實なる綜合的研究を試みたものである。これに對して三浦周行博士は現代法學全集の日本法制史を擔任執筆せられ多年の研究を要約して世に問はれた。その他の論説に至つては「日本古代親族考」(中田薫、國家學會雜誌)は儀制令に收むる五等親屬の分類は唐の五等喪服制を模せるものにして我が古代の親族制は却つて喪葬令服忌條の五等有服親の規定にその面影を傳ふるものがある。それに從へば母黨母族が支那に於けるよりも遙に高き位置を占むること、姻族關係は最少限度に認められし事、直系尊族以外の家族は己系父系祖系の三系を通じて其始祖に對する各親の世類に從つて之を縦に類別する特殊の分類が行はれし事を結論し得るよし法學新報は瀧川政次郎氏の天武律令考、大寶律令考の二篇を收めて居るが尙ほ同氏は「唐禮と日本令」(法學協會雜誌)に於て我令の基くところは概ね

隋唐の令にあつたが唐の格式及禮も亦参照されたる事實を神祇令儀制令假寧令喪葬令等につき證明した。又「石川年足」その法律的事蹟（歴史地理）も同氏の作である。なほ「律令時代に於ける俸給制度の一たる食封の研究」（宮崎勇藏、國學院雜誌）「攝津三島郡の條里」（天坊幸彦、歴史地理）「南攝の條里」（同人、同誌）「鎌倉時代裁判の職制及び手續」（小酒井儀三、三宅博士記念論文集）「足利時代の訴訟女權」（澤田吾一、歴史地理）があり「初期武家法に於ける所領沒收制度」（牧健二、歴史地理）は初期武家法に於ける所領沒收制度の位置、並に分類、將軍の守護權に基く、又所領の知行權に係れる、又將軍の主人權によるそれらの所領の沒收及守護地頭と沒收制度との關係を論じた。降つて徳川時代に入つては「徳川時代の物權法雜考」（中田薫、法學協會雜誌）があり、次に「徳川時代の特別民事訴訟法」（金田平一郎、國家學會雜誌）は特に金公事に關する研究にして當時の執行方法が原則として財産執行、而も官權的執行にして金公事訴訟法上には全く私的執行を見ざりしは極めて進歩的態度とすべく金公

事債權は元來當時者相互の實意を以て取結ぶ契約の結果にして元來官權の干渉すべきものに非ずとする思想の存在せる爲初期にありてはこれに對する官權の保護薄かりしが、元祿頃より健訟の風起り殊に金公事に於て甚しかりし爲その整理を目的として諸種の立法ありしもなほ債權保護の充分ならざりしは結局武士が債務者となること多かりし結果なりとした。この外「明治初期の法制史學」（瀧川政次郎等）を見る。（肥後）

社會に關するものを瞥見するに、通史として「日本社會史」（瀧川政次郎）がある。法律的なる身分觀念に中心を置き我國社會階級の變遷を述べしものであり、「江戸社會史」と題せる吳文炳氏の著書は先の「法制を中心せる江戸時代史論」の増訂と觀るべきもの、他に「日本社會階級史」（石井秀雄）が擧げられる。雜誌類に著目するに西田直二郎氏の日本社會思潮（岩波講座世界思潮）は社會思想の發展を説き、柚木重三氏の「我國上代に於ける氏族制度の推移」（新興科學の旗の下に）祝宮靜氏の「大化以前の勞働制度に關する考察」（國學院雜誌）「律令時代

の賤民制度概観」(史苑)「我國奴隸經濟時代に於ける奴隸其の使役者との交渉に就て」(史苑)「律令による雜戶陵戸の比較」(國學院雜誌)の研究がある。百姓とは凡ゆる姓氏を有する稱呼であるに、後世農民のみを指し、所謂無姓の百姓たらしめたる所以のものを検討し、沿革を敘し、庶民階級に於ける社會事相の變遷の跡を顧みて、平安朝に於ける政治の腐敗が殆んき大多數の人民を驅つて課役忌避の無姓の非人法師たらしめたその記念であるを説ける「無姓の百姓」(喜田貞吉、史林)は若き學徒井上久米雄氏の遺著、本邦古代姓氏の研究(單行本)と共に氏姓階級に關する注目すべきものであらう。「我國中古(前半期)に於ける階級關係の推移」(柚木重三、新興科學の旗の下)につゞいて近世のものには「徳川時代に於ける大名の階級的内婚」(横江勝美、社會學雜誌)あり、「文化文政度の町人精神」(關榮吉、社會學雜誌)は經濟的に絶對優位を占めた町人階級が階級性的變動に想倒せず支配階級と異なる文化の創造により無意識的に之を否定せるを考察してゐるのであるが、同氏には「文化と階級」(社

會學雜誌)の論攻もある。維新前後の社會相に關して「維新當時の社會現象に就いて」(藤井甚太郎、社會學雜誌)「古格舊例の一新」(綿貫哲雄、同誌)がある。後者は事例を専ら維新前後の史實に求め徳川封建社會が例格にのみ拘り因循風をなしたが同時に、求新の風、舊習一新の精神が勃興し、社會をその硬化の弊より救つたが、その舊習一新の原因として内外二種を挙げ、内的原因として、それらの舊慣先例は既に社會的機能を失ひ、社會生活の下には最早生長發達するを得ないが故に之を破壊し、回生の道を見出さんとしたものであり、外患の如き外部的原因がその革新に機縁を與へこれを助成したのであつて、假に外艦渡來がなくも何等かの外的原因が之に作用したであらうと説いてゐる。その他「明治維新と侍階級」(藤井甚太郎)「明治維新と町人階級」(中村孝也)「幕末浪人とその保護及び統制」(平尾道夫)の三篇が明治維新史研究に収録されてゐる。一昨年發表せられたる黒正巖氏の「百姓一揆の研究」に對する小野武夫氏の所説は昨年の斯界を賑はせるものであつた。農業經濟研究に於ける「百姓一

揆の歴史觀を論じて黒正教授の教を乞ふ(小野武夫)、「明治維新と農民階級の革命思想」(岡氏、社會學雜誌)とは相關せるものであり、前者は百姓一揆の中に革命性ありとする自己の所説を支持し、後者は徳川末期の農民は悉く勤王運動に参加し得ざる程の無識者ならざりしを説き、農民歎願書に現はれたる勤王思想と彼等の行動の下に潜む新社會主義の存在を検討し、更に勤王運動の延長たる明治八九年前後地租改正に關して起りたる各地の農民暴動及び夫の自由民權運動中に流れたる革命心理を考察し、明治維新の進行期間に於て農村有識者はその運動に参加せるも浪人武士に一步を先んぜられた、が十年後にして革命行動の本體をなすに至つたこと結論せるものである。反對の立場に立つ所の黒正博士は「小野武夫博士の批評に答ふ」(農業經濟研究)並に「北條縣百姓一揆の真相」(經濟往來)の二論文に於て小野博士の方法論に對する非難、革命性説を却けてゐる。後者に於て作州北條縣の明治六年の激しき暴動の狀を詳記し明治初年の百姓一揆は一二を除きて新政の誤解、無理解より來るもので

あり、若し明治初年の百姓一揆が徳川時代のそれの一變形又は連續であるとするならば徳川時代の百姓一揆の指導精神が如何なるものであつたか推察出來やうと結んでゐる。百姓一揆に關しては「伊那縣動亂記」(小野武夫、經濟往來)、「美濃國騷擾史」(黒正巖、經濟論叢)があるが、その他「百姓一揆の研究」の一事例に反對せる寛永正保年間の「米の浦農民運動史」(杉本英壽、單行本)に對し、越中米浦の農民逃散(經濟論叢)に於て黒正博士は明快に之を駁してゐる。尙黒正博士は「吉田藩老安藤儀太夫の死」(經濟史研究)と「百姓一揆史談」なる一書があり、後者は十二篇の百姓一揆に關する論文を收めてゐる。「寛政一揆岩立茨」「寛政一揆一件書類」「津市史稿本」を中心として寛政八年藤堂藩の土地分給策に考察を加へたる「津藩の均田策」(本庄榮治郎)と「莊園制度崩壞經路の一例として觀たる備後國大田莊に就て」(奥野高廣、國史學)をここに擧げて置くが、其他「飛騨白川村の大家族制」(岡村精次)の信據すべき報告が岐阜縣學務課より出され、又徳川時代の捨子の事象を家族團體の統制、家族團體相互間

るものを掲ぐるならば「判金の形式に就て」(入田整二、

ある。

三宅博士古稀記念論文集)ミ、明治八期間の決算書は兩を材料價值によらず名目價值によつて圓に換算計算されたものと説く「兩と圓との關係について」(堀江保藏、經濟論叢)がある。近世に入つては、長崎船載の白絲に對する内地産の和絲の取引に關する「和絲問屋の研究」(澤田章、國史學)を見る。和絲問屋の起源和絲の出産地等より安政の開港と共に直接開港場に出荷されるに至つた我國第一の輸出品の史的考察が試みられてゐる。更に京都、大阪、江州の吳服商人の住吉講、若榮講、永續講の事例を以てした「徳川時代の商人カルテル」(菅野和太郎、經濟論叢)徳川時代の近江商人の活躍を商業、工業、北海道開發、金融に就きて日本經濟史上の其地位を説ける「近江商人の活躍につきて」(堀江保藏、經濟論叢)の外「徳川幕府財政難の諸原因」(藤井幸永、三宅博士古稀記念論文集)

「徳川幕府の儉約令」(經濟史研究、年表)「徳川時代大阪の打壞し」に就て「塚本信治、彦根高商論叢」徳川時代の「記録に現はれたる皇室費」(日柳彦九郎、川口商學雜誌)が

幕末より明治初年にかけては、その經濟上の變化を概説せるものに「幕末の新經濟政策」(本庄榮治郎、經濟史研究)ミ「經濟史上の明治維新」(高橋龜吉、明治維新史研究)がある。前者が具體的に、後者が抽象的に觀念的に取扱ひ、政治革命が資本主義革命化せざるを得なかつたこと同じ結論に導き、尙後者には「明治大正産業發達史」の著書がある。

その他の研究に「幕末の商社」(菅野和太郎、經濟論叢)「明治初年の大阪爲替會社に就て」(同人、同誌)「明治初年の大阪の新工業」(黒正巖、同誌)「明治初年大阪の御用金」(本庄榮治郎、同誌)「明治政府と名目金」(吉川秀造、經濟史研究)「外人の觀たる大阪開港」(菅野和太郎、同誌)「明治維新後に於ける近江商人落魄の原因に就て」(同人彦根高商論叢)「舊會津藩士、斗南士族の就産」(堀江保藏、經濟論叢)「京都府に於ける士卒の歸農商に就て」(同人、同誌)がある。また「我國における科學的生命保險業の興起」(森莊三郎、國家學會雜誌)ミその論文を其一節中に

であつて、相州津久井縣荒川番所の五分一運上、飛驒國の口留運上、越後新潟港の湊役の研究である。他に「今切渡船論」(大山敷太郎、經濟史研究)、「徳川時代の宿驛」(樋畑雪湖、人文地理學報)、「土佐藩の造船と航運」(鷹城散史、土佐史談)がある。(寺尾)

次に宗教方面では、神社、神祇、神道に關しては「我國上代人の信仰界に現はれたる神祇の融合」(加藤玄智、國學院雜誌)は天孫民族の神々各地に祀られた神々を漸次融合して一つに成つて行く状態を述べ、「平家物語の神道の信仰に就て」(御巫清勇、國語と國文學)は、此の物語當時に於ける一般思想信仰界では神と相並んで佛を拜し、現當二世の福利と安樂を希ひ信仰對象の如きは何物をも抱容混淆して顧みず、固有の信仰を中絶して悉く之に同化しやうとしたと云ひ、「吾妻鏡に表はれたる神佛混淆の行事」(寺本慧達、龍谷太學論叢)は鶴岡八幡宮、伊豆三島神社、箱根及走湯兩權現、鹿島神宮、伊勢大神宮等に於ける神佛混淆の行事の主要なものに就いて述べ、「中世に於ける多賀神社の維持について」(牧野

信之助、歴史と地理)は此神社は一郡の總鎮守で、その神事は一郡内各莊等しく之に與つたが、此の社の神官兼御家人なる多賀氏は鎌倉幕府及び北條氏を背景として居つたもので、南北朝には足利氏は此の神社を利用した。この頃からはその社務は衆議を以て決したが、それは多く神社の維持に關する事項であつて、議定の結果を同時に制裁機關たらしめたこと述べ、「山崎闇齋の唯一神道研究期に就て」(木村省三、史苑)は先づ彼衣服部安休との論議の年月を述べて闇齋は寛文四年三月下旬江戸に下り五月歸洛の前に保科正之の前で爭論した。斯くして偶然にも唯一神道研究の端緒が開け、其後、彼が吉川惟尼より垂加靈號を受けるまで約七年間神道に關し各大家の門を叩き、各派の長を學ぶ事に碎心したと云ふこと述べ、次に安休と彼の議論の焦點を叙してゐる。其他「鹿島香取の神と中臣氏に就いての疑」(丸山二郎、歴史地理)「神像の考古學的考察」(重森三玲、風俗研究)「神祇史上から見た日鮮關係の考察」(宗宮祐天、國學院雜誌)「宗教學上より見たる神道の特徴」(加藤玄智、密教研究)

「御陰參の源流管考」(井上頼壽、歴史と地理)「松宮觀山
と高弟法忍」(河野省三、國學院雜誌)「神道と現代佛教」
(補永茂助、現代佛教)等の論説があり、佛教に關しては
「天平時代の佛教に於ける女性の勢力」(石崎達二、現代佛
教)は東大寺大佛脇侍の造顯者善光尼の事蹟を述べ、「本
朝法華驗記に現れたる淨土教」(能勢教明、國史と國文)は
本書に現れたる淨土教は四種あつて、切利天願生、諸佛
淨土願生、兜率天願生、極樂淨土願生である。而して王
朝の淨土教を獨立後のそれと比較すれば、美的要素に富
む事、樂天的なる事、行業は諸行往生である事の三つの
相違があるを説き「台密廬山寺流の傳燈」(獅子王圓信、密
教研究)は南北朝時代に於ける廬山寺流の教系及びその
學説を説き「教法宣布の跡を繰ねて」(本多辰次郎、現代
佛教)は意識して教法宣布の用に供したものに神佛習合
説なきがあるも、無意識の間に習合融化せられて而も教
法宣布に大なる效力があつたものに彼岸會と孟蘭盆會と
があるを以て此の二會に就て述べ、其他「佛教の福田思想」
(常磐大定、丁酉倫理講演集)「法然教義の特質と其傳承」

(高千穂徹乘、龍谷大學論叢)「高野山相傳の事相に就て」
(金山穆韶、密教研究)「承應の法論と唯己心説の一斑
を論じて二種法身義に及ぶ」(大沼善隆、龍谷大學論叢)
「祈りを中心として見たる神佛耶の三教」(田中治吾平、觀
想)「數珠弘傳考」(宮崎園遊、龍谷史壇)等があり、宗制
に關しては「宗旨人別改めの發達」(長沼賢海、史學雜誌)
は舊大村藩、淺野藩時代の尾道、山内藩、毛利藩、就中
大村藩の史料を主として宗旨改めから人別改めが發達し
た沿革を述べ、宗教一揆に關しては「三州一向一揆の原
因に就いて」(佐々木正行、龍谷史壇)がある。寺院に關
しては、「聖德太子建立の寺院に就て」(藤原猶雪、現代
佛教)は法王帝説以下の諸書に七寺、八寺、九寺等の諸
説があるが、確實なものは四天王寺、法隆寺、中宮寺の
三つであらうを説き、「高麗寺の遺蹟」(佐藤虎雄、史學
會々報)は山城狛の地に歸化人が住して其の故國の名を
地名として高麗寺を立てたものなるべく、其の遺蹟は木
津川の北岸、今の上狛驛の東方に土壇ありて古瓦等の出
土するより見て此地を推定するを説き、「國分寺の衰頹

に就いて」(魚澄惣五郎、史林)は國分寺の造營は政教一致の思想から起されたが、鎌倉時代に入つては此の思想は其の實を失ひ國家的保護を受ける事が少くなつた。國分寺の寺務は國司の重要な仕事の一つであつたが、國司制度が紊れてから宗教上の事に關與せず、藤原時代に入りては私人關係による保護のある寺院は寺領を擴大したるに反し、官立たる國分寺は有力な後援者なき爲め、次第に窮乏して、一旦滅亡すれば定額寺の如きを以て假りにそれに代用せられたやうな有様で、平安中期以來、その宗教的活動を見る事が尠く、鎌倉時代になつては全く忘れられたかの如く、假令記録等に散見するも、それは天平創建の御趣旨によるものとは全く別個のもので、宗派上の所屬も新興の諸宗に改り、或は神社の宮寺として殘存し或は單に傳統的に國分寺と稱するのみになつた。説き「佛足石歌碑の原所在について」(板橋倫行、史學雜誌)は奈良市外、藥師寺の佛足石の背後に立てる佛足歌碑は、もこ興福寺東院西堂の佛足石にそひ立つ歌碑であつたが、いつしか柏木村の田里の間に埋れて居たのを

發見して藥師寺佛足石と對をなすものゝ誤られて藥師寺に納められたものであらうとし、「王朝時代の寺院制度について」(魚澄惣五郎、龍谷大學論叢)は佛教渡來以後、寺院の建立は次第に多く天武天皇の御代初めて官寺と私寺を區別した。令制によれば寺院は治部省の管轄で、立審寮が其の事務を掌つたが、宗教上の事は僧綱が之を司つた。天平十三年には國分寺條例が出だされた。定額寺制度は奈良朝に既にあつた。此外、勅願寺、御願寺といふものは元來私營の寺院であつたものが御祈願寺に准ぜられるやうになつたものが多い。宗教の意味から寺院を區別するに大體祈禱寺、學問寺、菩提寺に分けることが出来る。官立寺院制度は奈良朝に一たび確立せられやうとしたが、藤原氏の興起に莊園制度の發達に伴ふて官立寺院は漸くその力を失ひ、之に代つて私的寺院の勃興を見るに至つた。定額寺、勅願寺たりしもので後世までも盛んであつたものは、それが官寺たるの性質からでなく全く私人的保護關係からであつた。説き「再びアジュールとしての高野山に就て」(福場保洲、密教研究)は、密教

研究第三十號に於て、アジュールミしての高野山ミ題し中世高野山が匿罪所或は庇護聖地ミして活動したことを述べたるを補足したものである。其他「元興寺の禪院ミ道昭の將來經」(松平年一、現代佛敎)、「再び元興寺の禪院に就いて」(同人、同誌)、「筑紫觀音寺伽藍の平面復原案に就て」(服部勝吉、歴史ミ地理)、「法起寺伽藍に就いて」(石田茂作、考古學雜誌)、「四天王寺出土の左寺瓦に就いて」(大脇正一、歴史ミ地理)、「成就寺及び附近出土の古瓦に就いて」(古住芳彦、同誌)、「津四天王寺ミ國寶民部省圖帳卷」(鈴木敏雄、考古學雜誌)、「伊豫の安國寺」(西園寺富水、伊豫史談)、「伯耆大山寺の研究」(沼田頼輔、三宅博士古稀祝賀記念論文集)、「廢寺趾に於ける層塔の心礎」(上田三平、歴史ミ地理)、「六波羅密寺の彫像」(源豊宗、同誌)、「蓮如時代の本願寺」(山本林、同誌)等がある。僧傳に關しては「聖德太子慧思禪師後身說に關する疑」(辻善之助、歴史地理)は此說の最古のものは神護景雲元年に淡海三船の作ミ認められる詩で、次は鑑眞の東征傳、思託の著はしたミいふ上宮太子菩薩傳等であつて、東征傳も思託に關係

があるものらしく、太子前身慧思禪師說をいひ出だしたものは此の思託であらうミ思ふ。斯くて此の說の上に或は達磨の傳説、日羅の傳説等が附加せられ、後には益々附加が多くなつたが此說は平安朝の初めに天台宗に於て利用した事によつて弘まつたものであらうミ思ふミ説き「親鸞聖人ミ東國」(鴛尾順敬、現代佛敎)は聖人は下野常陸の間に二十年も流浪されたが、其間に聖人の事業が成立したものと思ふミいひ「日蓮聖人の神宮奏上に對する疑問」(中村又衛、法華)は聖人が新宗教を開宣するに際し伊勢神宮にその事を奏上したミいふ事は日蓮傳にミつて重大なこゝであるが、享保の本化別頭高祖傳に初めて見える所で疑問を起さしむるのみならず有力な反證が日蓮遺文中にあるから此の事は恐らく後世宗徒の創作であらうミ述べ「元寇ミ日蓮」(市村其三郎、歴史地理)は日蓮の排撃對象は文永七年の頃を劃して念佛禪から眞言密敎へ移つた。その眞言排撃の動機は日蒙問題の發生に伴ひ祈禱密敎の活躍した事による。此の眞言排撃の後期に於て、特に文永十一年頃から日蓮の思想生活の中に本門

戒壇建立の事が崩し始めた。之は山門の戒壇を否認したもので叡山天台から日蓮宗への獨立を意味するものである。日蓮の末法觀は後には強烈に成つた。之は日蒙問題の所産に過ぎなかつた。説き「洛西松尾の隱者」(橋川正、現代佛教)は承元々々に寂した松尾の延期上人及び延期の寂後約十年に松尾に來た慶政上人に就て述べ、「妙蓮寺日應の俗姓に就いて」(昇塚清研、歴史地理)は、此人は從來伏見宮家から出た方だと言はれてゐるが、實は權大納言庭田重有の子ミなすが正しいと思ふ。述べ、「黒衣の宰相金地院崇傳」(辻善之助、史苑)は崇傳の行蹟を詳叙して、彼が事務の才幹を家康に認められて寺社行政に與かり、遂に幕府の樞機に參し、外交、法度制定の事に當り、而も剛腹にして其の主張を貫徹した爲め惡國師、氣根院の名を負ふた。本邦の僧侶にして政治に與かり黒衣の宰相とも稱すべきものは三寶院滿濟が頗る崇傳に似てゐる。崇傳は實に本邦政教相關史上の二大人傑の一である。いふことが出来る。世に往々天海を以て黒衣の宰相と稱するも天海の人物行蹟は此稱を受けるに足らぬ。述

べ、其他「元興寺智光の事ども」(寺崎修一、現代佛教)「方賓僧都ミ其の歌」(有川武彦、龍谷大學論叢)「台密總持抄の著者澄豪について」(山口光園、歴史ミ地理)「親鸞聖人の化風ミ聖德太子の行蹟」(生桑寛明、現代佛教)「親鸞聖人が和讃選述の業績ミその流傳」(同人、同誌)「日蓮聖人の實生活に就て」(中村又衛、法華)「日蓮聖人の生涯」(高田惠忍、同誌)「文化史上に於ける日蓮聖人」(守屋貫教、同誌)「日蓮聖人ミ叛逆の弟子」(中村又衛、同誌)「恭畏僧正について」(岡井慎吾、藝文)「徳川初期入明企畫の僧袋中良定」(藤堂祐範、同誌)「知空並にその門下の宗學」(大原性質、龍谷大學論叢)「四休菴貞極の著述攷」(井川定慶、藝文)等がある。基督敎に關しては「切支丹史中、オゴスチノ會の傳道」(姉崎正治、宗教研究)は慶長七年、此會の教師が我國に來つてから彼等が全滅するまで三十二年間に渡來した教師はバテレン十四人、イルマン二人、バテレン中の二人が日本人、二人がポルトガル人であつた外は皆イスマニヤ人であつた。始めに來た六人は早く日本を去つたが此外は皆殉敎の死を遂けてゐる

る。傳道は長崎とその附近が最も効果を現はしたものであつた。述べ「切支丹教師の日本潜入」(同人、史學雜誌)は秀吉の禁教を犯しての最初の潜入は慶長二年で、徳川幕府になつてから禁教を犯して潜入したものは續々あつた。慶長十九年の大追放後、寛永の末年迄の計畫的潜入は十三回あり、此間の單獨潜入と計畫的潜入とを通算すれば人数は七十五人である。潜入者は大抵何年かの間活動し、長いのは十九年間も働いた。其内、殉教者六十二人あり、死刑の目的は最初は見せしめの火刑であつたがそれが却つて激勵になつて、穴つるしに依つて長時間苦しめ、本人にも見物人にも心變りをさせやうとした。述べ「美濃尾張の切支丹」(柴田亮、史苑)は永祿の頃此の兩國布教の端緒が開けてから徳川時代に至るまでの此教の盛衰を述べ、基督教の中心地九州畿内より遠く離れた此の兩國に傳播の範圍も廣く且つ多數の切支丹を出だした。ここは日本基督教史上見逃すことが出来ぬ事である。説き「天草版異本さちりなきりしたん」(新村出、藝文)は昭和二年神戸の伊藤氏の所有に歸した吉利支丹版の稀籍

に就いて述べ、それは慶長初年間の天草版らしいこと、全文を掲げられてゐる。信仰思想に關しては「日本原始時代社會と不斷の聖火」(井手一馬、宗教と藝術)は魏志倭人傳にある卑奴母離は火の守の義で、原始古代の諸部落は各々不斷淨火を神として保持し、之が當時の信仰生活社會生活と密接な關係があつた。述べ「聖火崇拜と日奉氏」(橋川正、歴史と地理)は日奉氏の存在した事を以て日火同原の上から聖火崇拜の一痕跡を解したい。又口置といふ地名又は神名が山陰北陸地方にあるが、これらも聖火崇拜の信仰が残存した爲めであらう。説き「靈異記に現れたる冥土思想」(小笠原宣秀、宗教と藝術)は惡道に就いては詳細に記述されてゐるが淨刹に就いては極めて簡單である。之は當時の時代の考へた冥土が消極的であり、眞實の宗教的意義に於ては尙ほ不純であつて、之が又原始的であり現實に即した冥土思想であるといふ助證となる。述べ「萬葉集に見えた佛教思想」(鈴木暢幸國學院雜誌)は我國の佛教思想中、最も勢力のあつた現世修福と來世追善との兩思想は此の集に全然表はれてゐない。

萬葉歌人の心に最も衝動を與へた佛教思想は人世の無常にして此事より悲觀厭世の氣分を養成した。併し因果觀は彼等にミつて餘りに複雑に過ぎ未來觀は彼等の或者は上古の考へのまゝに死後は黃泉に行くものさしか考へて居らなかつたミ述べ「今昔物語集に現れたる奈良平安兩時代の願生思想」(能勢教明、龍谷大學論叢)は本集に現はれたる願生思想には上天信仰、兜率上生、西方往生の三種があるミ説き、「傳教の末法觀について」(市村其三郎、史學雜誌)は彼の末法觀は、その新佛教提唱をめぐる宗教闘争に直面して現はれたものであらう。さればその末法觀は彼の示寂と共に社會から殆んど全く顧みられなくなつた事に不思議はない。併し斯く一時的個人的現象に過ぎなかつた末法觀は平安末期以後に於て社會現象的に復活して偉大なる役割を演じたミ説き、「鎌倉時代に於ける末法思想の一考察」(武藤誠、歴史ミ地理)は、平安末期の社會の混亂不安を體驗した京都の公卿文化の人々の間には末世的意識が強くなり、社會思想として法然親鸞によつて民間に弘まつた。鎌倉時代後期に日蓮の説い

た末法思想は法然親鸞ミ異り、法華經流布の時に生れたいふ悦びであつて積極的樂觀的なもので、鎌倉時代末期に至り此の思想は弱くなつた、此の變化の背景としての社會思想は此の時期に盛んになりつゝあつた國家意識ミ革新的思潮ミであつたといひ「鎌倉武士に於ける精神生活の一考察」(藤直幹、史學雜誌)は自ら働きかゝる力を失ひ外物の力を恐るゝ京都文化圏内の人ミ、自力を信じて外物の力を認めない武士ミの精神を比較せば兩者の間に一致し得ない本質的相異がある。鎌倉武士は淨土宗を京都文化の一潮流として受入れたが、自力を否定する此宗は現世に於ける自己を主張する武士の精神ミは本質的な調和を保ち得なかつた。彼等は遂に現世に於ける價值世界の顯現を目的とする禪宗に彼等の精神生活により近きものを見出したのは自然の事であつた。ミ述べ「謠曲の思想史的考察」(清原貞雄、史學研究)は室町戰國時代に出來た謠曲を當時の思想史資料として見れば謠曲には著しく憂鬱な頹廢的氣分の漲つてゐるこゝまであつて、道德の立場からは當時は徳教地を拂ふた時代であつたが忠孝

貞節を題材としたものもあつて、之は一部有識者が道德の廢れたのを興さねばならぬと意識して居つた事を示すに述べ「寺子屋に於ける天満天神の信仰」(高橋俊乘、藝文)は寺子屋の天神信仰は鎌倉室町時代に天神崇拜の盛んであつた事の繼續發展であつた。天神の外、寺子は文殊菩薩も信仰して書道上達を祈つたまで天神講、文殊講等の方法に就て述べ「維新前後に於ける平等思想に就いて」(伊藤八郎、國史と國文)は自由平等思想は一は徳川時代階級制度の反動として二は學問の發達が國民の自覺を高め階級制度を打破すべき所以を知らしめ、かくて維新前後に於ける平等思想の盛行を見たが華士族平民の三階級は守舊的階級思想が一面に強くなり徹底した平等思想でなかつた事等によるに説き「評論新聞に見えたる社會法律思想」(牧健二、史林)は此の新聞は自由、民權の貴き事を唱へ、その見地より社會法律制度に對し急進の意見を放つたことを述べ、其他「常世國思想の發達」(竹岡勝也、史苑)「推古時代に於ける天の思想に對する一考察」(石崎達二、國史と國文)「聖徳太子の人生宗教と國

民精神」(黒上正一郎、國語と國文學)「平安朝に於ける災異と其影響」(林安孝、龍谷大學論叢)「地藏思想の渡來に就て」(眞鍋廣濟、同誌)「法華經の信仰と武士の生活」(小林一郎、法華)等の諸論説がある。(松野)

文學方面では國文學に「國語國文學研究雜誌索引」(國語國文の研究)が三百餘種の雜誌を涉獵し分類して研究者に寄與する所多かつた事を記さねばならぬ。「巫女の神話から叙事文學の誕生へ」(金田一京助、民俗藝術)のブロッセスをアイヌの口碑文學が皆第一人稱説述體の形を持つ事がその起源として託宣の形だつた事を暗示するてふ見解から、アイヌのお婆さんの物語りを書き留めてゐる「祝詞考」(折口信夫、民俗學)は神の言葉^{のりこ}を傳ふる官處に出づ^りこし、その形を分析して祝詞壽詞鎮詞の三種の型を説き、延喜式祝詞が此等を混同してゐる點に平安朝初期に變革された跡を認め、天^ツ祝詞の性質を説明して諺的のものとする。「古事記の研究に就いて」(倉野憲司、國語と國文學)は善く纏つた手引きであり、「賀茂真淵の古事記研究」(石井庄司、國史と國文)を彼の古事記頭書、眞

淵訓古事記上卷に依つて見、それが宣長に與へた影響を見、人代を盡して神代をうかゞふ眞淵學の本質を吟味して彼の古代學が萬葉に終始した事を批難する人々に抗辯してゐる。「源氏物語を鑑賞しようとする人の爲に」(島津久基、國語ニ國文學)先人が或は佛敎的に又倫理的に見ようとした態度を叙べ、本居宣長がものゝあはれを見た態度を推し、今は文學として觀賞する爲に『玉の小櫛から更科日記へ』の評語を説いてゐる。「源氏物語の構想について」(門前眞一、國語國文の研究)その中特に桐壺より夕顔までの四卷を詳細に分析し、表面長篇の形式を具へつゝ、内面的な強い力から發生したものでなくたゞ辻つまを合す爲事件と事件とを外面的に繋ぎ合せたに過ぎぬとする。「源氏物語の先蹤に關する一考察」(岩城準太郎、同誌)に就いて物語なるものを史書に繋がうとして作者からもこれを暗示する言葉を引き出して國史との關係を見、その製作動機を當時愛讀された史記に求めようとする注意さるべき考察である。「紫式部の文學論」(三木幸信、國史ニ國文)は創作態度の解説とその後人の論議の

紹介である。「紫式部の觀照ニ思想」(西片但一、國語ニ國文學)源氏物語の描く作者の自畫像いろく、「島津久基、同誌」「紫式部の入ミしての生涯」(河岡新兵衛、同誌)「紫式部宮仕年代考」(今小路覺瑞、國語國文の研究)も物語の觀賞に資する所多いであらう。尙序に上代の文學論に關する數篇を紹介しよう。「古代文學批評の完成」(久松潜一、思想)は枕草子が蜻蛉日記の後を承けて寫實的立場を創作の上に實行しつゝ、文學觀として物のあはれを重んじそれによつて現實を撰擇した點に浪漫的傾向を認め、その寫實的性質を萬葉集にまで系統づけ、浪漫的傾向のより本格的なるものとして紫式部に唱へられた文學觀を吟味し心と詞との調和を認め、それを更に進めた公任に俊成定家等に承をひく幽玄論への暗示を見出してゐる。「物語文學批評の黎明時代」(荒木良雄、國語國文の研究)は源氏の出現まで物語はたゞ浪漫主義的なものがのみで批判の眼を持たなかつた事を見、源氏の中にある物語批評精神を摘出して人生の現實の眞寫としてのリアリズムへの展開を跡づける。「中世に於ける佛敎的文學

論概論」(平岩十四郎、國學院雜誌)は美の世界に憧れる物語が生活原理たる佛敎理論によつて度られる時分裂する、價値の顛倒に伴ふ文學論の變化を叙べてゐる。資料的なものには「枕草子の異本の研究」(有馬賢頼、國語國文の研究)「清少納言と班子女王」(山岸徳平、國語と國文學)「大和物語傳本考」(池田龜鑑、同誌)「堤中納言物語考」(清水泰、國史と國文)「堤中納言物語私考」(同人、國語國文の研究)があり、「讃岐典侍日記の作者について」(玉井幸助、史學雜誌)諸説あるを本文の分析による作者の經歷を中右記に参照して伊豫三位兼子の妹長子とする考證である。「平家物語出典の研究」(後藤丹治、國語と國文學)「維摩經と方丈記」(豊田八十代、同誌)の思想的交渉と方丈記異本の解説。「徒然草研究史」(重松信弘、同誌)ふせや物語に就いて「桑田忠親、國學院雜誌」「お伽草子和泉式部について」(古井憲彰、宗教と藝術)「無名草紙考」(杉山敬一郎、國語國文の研究)又「酒頭童子の伊吹山繪詞に就いて」(岡田希雄、國史と國文)に龍谷大學國文學會で翻刻した小川本紹介があり「井原西鶴は平山藤

昨年の史學・考古學・地理學界

五か(藤村作、國語と國文學)と見聞談叢によつてその生活が報告されてゐる。「馬琴の八犬傳と個性描寫」(後藤丹治、藝文)が無いとする説に對して八犬士の外的な特長と行爲動作の上にも特色をたてゝゐる事を指適する「現代文學の序説」(湯池孝)「現代文學諸相の概観」(片岡良一、國語と國文學特輯現代文學考察)は百六十六頁と四百一十一頁との二長編で明治大正文學全般に互る優れた批評的考察として注意せられる。「浪漫主義私見」(鹽田良平、同誌)は明治文學に於けるその起伏發展本質及び自然主義との交渉を見、「樋口一葉の展望」(岩城準太郎、同誌)「獨歩の小説」(湯池孝、同誌)「啄木の研究」(藤川忠治、同誌)がある。歌謡では「上代歌史概論」(佐々木信綱、同誌)に上代文明を背景として育かれた歌謡の形式の特性、展開を跡づけ、「若き萬葉研究者のために」(久松潜一、同誌)纏まつた手引があり、國學院雜誌が萬葉號を二回出した。「萬葉集に現れた文學意識」(久松潜一)は文學の創作を生活意識と文學意識とに分け生活感動を文學的意識で表現せる過度期のものとし、對象とさ

第十五卷 第二號 二七七

れた美意識を形式美、内容美に分けて吟味し、集編纂の分類論を主とした批評精神を検討してゐる。「萬葉に現はれたる極光的一異彩」(彌富破摩雄)は國體觀念を吟味し「萬葉集に見えた佛教思想」(鈴木暢幸)はその單純な主觀性を指摘する。「歌謠としての萬葉集の歌」(藤田徳太郎)は寓意を持つ流行歌を解説し歌謠の流行性を説き、「東歌の成立と高志歌」(高崎正秀)は東歌の種々相とその中にある生活及びそれと對立する高志歌について又催馬樂との關係に及び、「東歌の進境」(西角井正慶)を歌風の比較で辿る。「萬葉集撰定の研究」(平岡好正)「萬葉集に就いての解説」(折口信夫)「萬葉集の書籍としての様式」(武田祐吉)は共に萬葉研究に好き指針である。「萬葉集の古鈔本及び斷簡に就て」(佐々木信綱)の資料的研究、「萬葉集に關する富士谷派の學說」(松尾捨次郎)「鹿持雅澄と萬葉關係の書寫本」(會根研三)「正岡子規の萬葉集觀並にその運動」(橋田東聲)は先人の研究を示し、「萬葉集總書目」(山室武夫)は全國百餘所について五百餘部を採訪した目錄である。尙萬葉關係のものに「人生詩人山上憶良」(王

置光三、觀想)「寄物陳思歌の表現法について」(中島光風 國語と國文學)「萬葉女流管見」(森本治一、同誌)「萬葉集中の支那語直譯」(林古溪、斯文)があり、「萬葉釋文索引」(國語國文の研究)は古事記傳に見ゆる萬葉集の題詞、歌句、註文の檢索用として調法なものである。「紀記歌謠に於ける新羅系歌形の研究補説」(土田杏村、同誌)は「上代歌謠」の補遺として孫晉泰「朝鮮古歌謠集」金素雲「朝鮮民謠集」特に小倉進平「郷歌及び史讀の研究」に發表された資料を見、それらに就ての説との異同を吟味し批評してゐる。「古今集傳本の系統論」(西下經一、國語と國文學)は此等の研究の代表的のものに見らるべく「和泉式部とその歌」(上田秀夫、同誌)の解説、「長秋詠草の成立」(見山信一、同誌)は俊成九十歳前後と推定してゐる。「連歌の式目に就いて」(福井久藏、國語國文の研究)弘安式目の校合によつてその漸次變改された事を推定する。「俳諧論戰史」(顯原退藏、同誌)は蘊蓄が窺はれ「江戸時代の女俳人」(志田義秀、國語と國文學)の論評、「蕪村を觀賞しようとする人に」(同人、同誌)の手引きがあり、「子

規の俳論（伊東靜雄、國語國文の研究）は彼の芭蕉論より寫生説に及び其歴史的意義を説いてゐる。「宴曲の研究」（小山正、國語と國文學）「謡曲の研究法」（佐成謙太郎同誌）は一般に互る手引き、「金春禪竹に關する一考察」（能勢朝次、國語國文の研究）は祕傳書によつて世阿彌を祖述し展開した跡を見、「狂言記に見えた文藝の境地」（市村平、國學院雜誌）、は狂言の持つ特殊の型を指摘し、觀賞者に對する諷刺の爲描かれた人物の姿を分類してゐる。「狂言作者としての鶴屋南北の地位」（大友宗運、宗教と藝術）を先づ五瓶と比較し『五大力戀織』『盟三五大切』によつて兩者の差を見つゝ更に南北より默阿彌への推移を考へ、兩者に介在した南北の特殊地位と意義を説いてゐる。

●國史學では「林羅山と其史學」（肥後和男、史林）は時代が宋儒學を要求した時羅山が從來の學問保持者なる僧侶階級でなく町人より出でた事に意義を見出し、過去を脱却しつゝ、史書を生む時代の矛盾を歴史を過去のものこそす理想追求の學とする點に解き、羅山の史學の特色に及

んでゐる。「近世の生んだ二大史家」（三浦周行、同誌）は近世文化の基調として國民自覺となり然もそれが儒者によつて指導された變態文化とし、義公の三大特筆と白石の國王復號問題にその影響を見、國學者が指導精神となつて尊皇論が爆發し、皇室中心の近世的特色に反動的な幕府の矛盾した存在が没落しゆく事情を説いてゐる。「義公の修史に關する三上、三浦兩博士の説について」（菊池謙二郎、史學雜誌）三方面からの批評が加へられる。（一）伊東祐親曾我兄弟傳稿本附箋の筆者を義公とされたのを（イ）書風から、（ロ）内容から義公に不似合の文意があり兩傳が義公没後に完成された點、符箋に對する後人の態度、立稿者酒泉竹軒の改稱年月が義公の歿後なることにより否定し、（二）編纂方針に風俗に害あるものを削れこの説の解釋を非とし、（三）准勅撰説に就いてそれが義公以來の精神でないとする。これに對して「大日本史舊稿本の附箋の筆者及び其准勅撰説につきて」（三浦周行、同誌）は筆蹟はやゝ常と異なるも不用意の間尙特色ありとし兩傳の完成と義公死歿の年月に就き前者の論據たる改名

問題による否定も後人の同一筆たるにより意義なきもの
 多し、編纂方針について伊東祐親傳の附箋により駁し、
 准勅撰説も確證をあげてゐる。「京大教授三浦博士の駁論
 を讀んで」(菊池謙二郎、同誌)は會我傳の立稿者石井彌五
 兵衛の在職年代より否定の一證を出したが、之に對して
 「大日本史的稿本の立稿者につきて」(三浦周行、同誌)は
 その論據の價值なきを説いてゐる。

儒學では「菊池の儒學」(大江文城、斯文)「藤原惺窩と
 姜夔隱の關係」(松田甲、歴史地理)の考證、「江戸時代初
 期の愛書家」(森洗三、同誌)特に林家を中心とした逸事、
 「會津に於ける陽明學說禁止について」(木村定三、史苑)
 儒學史上の珍らしい事實の闡明、「近世儒學の先達愛甲喜
 先生」(徳重淺吉、國史と國文)の紹介がある。

教育方面では「王朝時代の私學校に就いて」(大森金五
 郎、歴史地理)文章院等が大學校に附屬した寄宿舎研究
 所とする新説に對して然らざるを説明し「寺小屋に於け
 る天満天神の信仰」(高橋俊乘、藝文)は寺小屋が手習ひ
 のみなると共に盛になつた天神信仰の行事が説かれる

「金澤文庫と諸家の研究」(樋口龍太郎、國語と國文學)主
 として近藤正齊に就いて批評がある。「近世初期に於ける
 婦人學問」(谷村淳子、歴史地理)は當時一般の好學風
 潮を背景として女性の讀書學習に就いて、中御門院の御
 獎學を述べてゐる。

自然科學では「日本數學史論」(三上義夫、史苑)は澤田
 吾一氏の『日本數學史講話』の詳細な批評の形式をとり著
 者の研究の發表と見らるゝもので後に日本數學史の骨格
 がある。「我國の科學史上に於ける廣川晴軒の地位」(同
 人同誌)は彼及び土地越後における科學學問の傳統を見、
 黒船來航の事實によつて醒めた愛國の熱情から科學研究
 に向つた時代の機運とその中に生れた彼の學問體系を見
 ようとする。單なる學說の解説に止らないで時代と關係
 づけようとする着眼と努力を多ししたい。

風俗方面には「歲事の研究」(江馬務、風俗研究)にその
 意義分類發生形式に就いて考察され、たゞ漫然たる蒐集
 に陥つてゐる歲事研究に善き刺激となるであらう。「御事
 の新研究」(同人、同誌)は事始め事納めの起源を佛生、佛

成道とし、正月の事始めを混同され附加された種々の行事を説き、「門松の研究」(同人、同誌)を支那風俗に求め「羽子板の起源」(同人、國史文)を左義長に焼ける毬杖が剛卯卯杖柄杖の影響を受けたものとしその變化を跡づけ、「雛祭の變遷」(同人、風俗研究)を三月三日人形を流す風習を雛遊が室町時代に混同したとし、その「人形の研究」(同人、同誌)は祓ミ關係したその觀念の時代的變遷とその種類があり、「上代日本の服飾界について」(櫻井秀、國學院雜誌)南方系のものとし前方交叉式片袒式貫頭式の三種を解説し特に小忌について説く。尙「中世に於ける理髮様式」(同人、歴史地理)「江戸時代後期の結髮」(江馬務、風俗研究)「足駄の變遷」(同人、同誌)「からかさ考」(松本茂平、同誌)がある。

歌舞音曲方面では先づ能に就いて「表現の日本的なるもの」(野上豊一郎、思想)能が歌詞舞踊の各方面から一面的に見らるゝ事の非常を説き此等を對立しつゝ、一の目的に向つて調和せしむるものとして『位』の意義を論じ、幽玄の外に世阿彌の考へた開位の破格律的な自由性に大

乘的日本的なるものを認めてゐる。「弱法師」(土田杏村同誌)はこれを世阿彌の代表作と認めて全篇の構想、章句を執へて世阿彌の精神の深さを見ようとする美しい批評であり創作である。然し斯かる直接なる理解にのみ依頼しそれを歴史的人物世阿彌に設定する事に就いて今少しの用意が拂はねばならぬのではないか。「能樂が嗣いだ祖樂の傳統」(小寺融吉、民俗藝術)を舞臺の構造を神樂殿ミ關係づけて考證し能の組織をも神事に關係あるもの、傳統ミ解釋する。これミ關係して「能樂に於ける『わき』の意義」(折口信夫、同誌)は日本の藝術が説明役即ち『わき』を必要としそれが次第に副演出を重ねて自己を展開し、猿樂がもミ田樂に對してわき藝であり能樂として發達後も尙其の重要性が保存された事を云ふ。前者ミ共に能樂の組織發達研究に一の光りを投ずるものとして注意さるべきである。「春日神社ミ能樂」(高野辰之、寧樂)も興味ある。土俗舞踊では「現存せる諸方の田樂について」(岩橋小彌太、民俗藝術)解説し尙田樂なるものについて、近時唱へられる神祕的意義附け一指を放つてゐる

る。「春日若宮祭の田樂」(同人、寧樂)は前者の中の一の解説、「えんぶり(盛態)に就いて」(田邊尙雄、高崎三、國學院雜誌)は青森縣八戸町新羅神社に奉納さるゝ古舞踊の紹介である。尙田遊びの研究(民俗藝術特輯)に此種のものゝ考察に資すべき多くの風俗が紹介されてゐる。人形芝居に就いては「人形芝居研究」(民俗藝術特輯)が獨自の立場からの研究發表があつた事は感謝せなければならぬ。即ち人形の起源が古く原始信仰に基する事ゝ、地方土俗人形芝居の探訪により優れた藝術にまで到る段階の辿られる事である。「人形ミオシラ神」(柳田國男)は人形芝居の原始の姿ミとしてオシラ神の姿ミオシラ遊びの各種を博く調査報告してゐる。「偶人信仰の民族化並びに傳説化せる迄」(折口信夫)には主として祭禮の人形、くゞつの人形虫送り人形ひなあそびおひな様等各種人形の型の變化が吟味される。「巫女の持てる人形」(中山太郎)は其一の例であり「人形ミ人形つかひ」(小寺融吉)はオシラまつりの有様を紹介して人形芝居ミ比較してその原型を指摘し、のろま人形活動人形の舞臺構造を

歌舞伎ミ比較しつゝ完成されゆく形を見る。「我が偶人劇の世界的地位ミ其特色」(南江二郎)は世界諸國の人形芝居の起源特質を説明し我國偶人劇の構成要素及び演出上の特色ミ缺陷を論じ尙佐渡のノロマ人形の機構「其他各地の人形芝居が紹介されて興味豊かなものがある。」人形の二系統「竹内勝太郎、同誌)を埴輪ミオシラ神の二系統に分け、前者は人間世界を代表し後者は神の世界を代表するものであり、後者より人形芝居の發生した理由として神の人格化より人に似た形を與へこれを遊ばせたのが變じて人間の遊びなる人形芝居に展開した事を説き、尙西宮百大夫社に就て吟味してゐる。「江戸時代の歌舞音曲(江馬務、風俗研究)の種類樂器の各種に互る紹介」(初代都一中傳の研究(草部了圓、國史ミ國文)は傳記研究資料たる明福寺過去帳ミ名人辰忌録ミの矛盾を指摘しその藝歴を論じてゐる。「古尺八について」(仲田勝之助、東洋美術)其構造ミ音律ミを説明した。「近世に於ける婦人ミ舞踊」(谷村淳子、史學雜誌)の關係、その種類、流行の有様に就て説かれてゐる。

美術工藝方面では東洋美術を寧樂が「正倉院の研究」

『正倉院史論』を特輯した。内容は各分野に亙るが便宜の爲一括して紹介する。東洋美術では「正倉院之記」(大島義脩)は簡單乍らも權威ある人の説きして見るべく、「正倉院の校倉」(關野貞)は校倉の系統正倉院の沿革に次いでその構造形式に就いて詳細な解説があり「我國の山間地方に見らる、校倉(今和次郎)は併せ讀んで興味がある。「正倉院文書に見えたる美術及工藝に關する記事に就て」(塚本靖)の考證、「樹下美人論」(春山武松)の製作地を問題とし廣くこの形式を尋ねてその發展を見、起原を樹木に對する信仰に求めて印度に起るゝする。「正倉院に保存せらるゝ公驗辛横について」(會津八一)同種のもの、拓本により弘安年中の製作とし、此以外にも後代の移入品あるを指摘する。「正倉院の刀劍」(關係之助)「正倉院の金工に就いて」(香取秀眞)「御物縹地蓮花大文錦毬毬袋の裂地に就て」(明石染人)「その頃の染織美術」(澁江終吉)「正倉院御物漆藝品の概観」(吉野富雄)「平文平脱文の解」(廣瀬都巽)「平脱及平文の手法に就いて」(吉田包

春)の専門技術に關する有益な解説「正倉院の書道」(内藤湖南)は聖武天皇、光明皇后の御筆蹟の手本をたづねて當時の書風を見、其後世書道に及ぼせる影響を説き、「正倉院文書」(三浦周行)の種類書風これらの歴史的意義が要約され「聖語藏の古經に就いて」(大屋徳城)の解説を印刷史上の地位評價がある。「正倉院御物修繕の話」(木内半古)「正倉院勅封庫の記事」(稻生眞履)「明治五年正倉院開封に關する日記」(蜷川式胤)は明治初年の状態を見るべき貴重な資料である。「正倉院御物年表」(石田茂作)、「正倉院年表」(安藤更生)「正倉院沿革史」(同人)は研究に役立つ所多い有益な記事である。寧樂も併せ見るべく紙數制限の爲題目を記せば、「正倉院の價値」(筑波藤麿)「奈良朝藝術に關する二三の觀察」(黑板勝美)「正倉院御物中の繪畫に就きて」(溝口頑次郎)「正倉院御物兵器に就いて」(關係之助)「正倉院御物の玉蟲翅飾其型式に就いて」(森本六爾)「正倉院の三彩陶器に就いて」(奥田誠一)

「正倉院御物佛器の二三」(廣瀬都巽)「正倉院の建築」(岸熊吉)「奈良朝繪畫に就いての一考察」(中井宗太郎)「伎樂

面〔高野辰之〕奈良朝遊戯の二三に就いて〔江馬務〕御物彈弓散樂圖說〔岩橋小彌太〕正倉院御物彈弓にあらはれたる原始散樂〔原田亨一〕正倉院文書中王義之の臨書に就いて〔尾上八郎〕東大寺鑿鏡用度注文和解〔香取秀眞〕正倉院御物唐尺を拜して〔藤田元春〕大佛開眼まその遺物〔橋川正〕正倉院の寫經に就いて〔大屋徳城〕正倉院の古文書に就いて〔佐々木信綱〕御物聖語藤の古寫經を拜して〔小野玄妙〕がある。「正倉院の話〔林古溪、觀想〕も善き案内記である。繪畫では「推古期の繪畫〔澤村專太郎、佛教美術〕は法興年間を文化活動展開に重大な意義あるものとし、大陸渡來の美術師の活動を叙し、天壽國曼陀羅が客觀的な形式上の整ひ以外に魂の力を持つ點に時代の藝術的雰圍氣を感じ尙王蟲厨子の圖相價値を詳論してゐる。「藤原末期に於ける佛教美術と文學との結合に就いて〔源豐宗、同誌〕主として寫經を通して見それにより美術が新なる光彩を加へた事を云ふ。鎌倉期の美術と僧重源〔田澤坦、國華〕は南無阿彌陀佛作善集により藝術に關する事頂を採つて分類し更に彼を通して

鎌倉初期の藝術を見んごするのである。「村山家聖徳太子圖に就いて〔二千里、同誌〕太子圖一般の特色を説き本圖を仁和寺像と同系とし、「詫磨榮賀の畫に就いて〔瀧拙庵、同誌〕は前田家十六羅漢像を紹介し畫風時代を説く「戸隱山鬼女退治の新繪卷〔坂井衡平、同誌〕は戸隱神社神主家のもの、詳細なる紹介「最近發見されたる二つの繪卷物〔藤懸靜也、佛教美術〕は駒競行幸繪卷、長谷雄卿双紙の解説、「狩野元信の石山本願寺襖繪作成に就いて〔同人、國華〕天文日記による考證、「狩野光信の遺作〔源豐宗、佛教美術〕三井寺塔頭觀舊院棟札に光信の記載あるより推定し、「大覺寺の山樂〔土田杏村、東洋美術〕は先づ桃山時代繪畫から山樂らしきものを抽出して大覺寺のそれを解釋せうとする明快な態度であるが方法に就いて疑ひを有つ事能樂弱法師の條下に書くと同じものがある。「前田家に藏する宗達の源平合戰屏風繪に就いて〔拙庵、國華〕草花の達人として知られた彼の人物畫に對する優れた腕を見土佐派の特色を帶びる事を指摘する。「寫樂の大童山土俵入圖に就いて〔春山武松、東

洋美術)年代考證と畫精神を見「支那版畫と浮世繪版畫」(藤懸靜也、國華)の交渉を説いて後者が日本獨得のものに信ぜらるゝに拘らず發生にはその影響を受くる事大なるを云ふ。彫刻では「飛鳥時代の彫刻」(源豐宗、佛教美術)は要を盡した概論として見るべく、「御物十八體佛に就いて」(同人、同誌)は其特殊論である。「法隆寺金堂阿彌陀像に關する文獻」(會津八一、東洋美術)はその研究に有益なる資料の蒐集、「法隆寺金堂の四天王像」(濱田耕作、同誌)「彫刻史上に於ける百濟觀音」(植田壽藏、佛教美術)「興福寺の天部八部衆と釋迦十大弟子像の傳來に就て」(安藤更生、東洋美術)「神護寺の佛像」(春山武松、同誌)「我邦の檀像と醍醐寺聖觀音に就て」(田澤坦、國華)は共に有益の文學、「日本彫刻史上に於ける木彫の衰滅」(丸尾彰二郎、同誌)は鎌倉時代に入つて纏絡に金具を用ひ玉眼を入れ又衣を被せる如き材料の寫實に至つて彫刻としての意義の失はれた事を説く。「金銅佛の技法」(香取秀真、佛教美術)は専門家の言として聽くべきである。建築では「春日造に就いて」(服部勝吉、寧樂)「飛鳥時代

の建築の起源と其特色」(關野貞、佛教美術)は支那朝鮮に系統を尋ね次にプラン細部を見、高麗尺問題に論及する。「筑紫觀世音寺伽藍の平面復原案に就いて」(服部勝吉、歴史と地理)は「伽藍配置意匠に關する圖式解析法」(同人、建築學研究)と相俟つて有益な論文、「松梅院本堂と梅田釋迦堂」(天沼俊一、東洋美術)は例により詳細悉切の解説、「廢寺趾に於ける層塔の基礎」(上田三平、歴史と地理)は資料の報告、「建築より見たる徳川家靈廟」(伊東忠太、史蹟名勝天然記念物)には神佛二元的のものが調和し當代藝術の悉ゆるものが織り込まれてゐる點に特色と價値とを認める。「日本古建築研究の彙」(天沼俊一、史林)は窓の詳細に終始してゐる。工藝では「玉蟲厨子の特殊研究」(佛教美術)が注意される。「玉蟲厨子及び其の繪畫に就いて」(源豐宗)「玉蟲厨子の玉蟲翅飾に就いて」(濱田青陵)「玉蟲厨子佛畫の顔料は蜜陀僧に非ざるの辯」(六角紫水)「玉蟲厨子の建築的價値」(田邊泰)「玉蟲厨子の文様と其源流」(伊東忠太)は必讀すべき研究である。「中宮寺曼陀羅に關する文獻」(會津八一、東洋美術)は研

究者に重寶のもの、「天壽國繡帳」(源豐宗、佛教美術)は圖相を表現に就いての研究「當麻曼陀羅は繪?刺繡?織帳?」(廣岡城泉、東洋美術)は有利なる條件下の觀察により綴織製品とする。藤田家所藏の佛功德圖時繪經管に就て「藤懸靜也、國華」七寺仁和寺のものに比較し純日本趣味で作られた逸品とし、「名古屋附近の漆藝」(溝口三郎、東洋美術)を併せ讀むべく、「飛鳥奈良時代に於ける鏡作」(高橋直一、國學院雜誌)は下野河内郡出土の瓦に鑄造鳥の銘あるより存在を推定し遺品を解説する。

庭園方面では「萬葉時代の庭園」(吉永義信、史蹟名勝天然記念物)は萬葉集に依つてその構造風致を見、「虎の孤涉しの庭園に就いて」(外山英作、歴史地理)西芳寺に發見し此種庭園に對して從來の誤れる考へを駁してゐる尙外に「發掘せられたる慈照寺の瀧口石組に就て」(龍居松之助、史蹟名勝天然記念物)「後樂園史」(田村剛、同誌)「薩藩造庭事情調査覺書」(永見健一、同誌)がある。「藤」史料に關するものとしては先づ第一に「談山神社文書」を挙げやう。一昨年「春日神社文書」を編纂出版された中

村直勝氏の手になつたもの、平泉澄氏編著の「江都督納言願文集」と共に昨年の收穫といひ得るであらう。他に「菅居古文書第一卷」加賀藩史料第一編「横濱郷土史料吉田新田古圖文書」、又夫々益する所尠くないであらう。眞蹟を窺ふべきものに「禪苑天皇紀墨寶」(倉光活文編)「宸筆集」(堀野稔編)「禱花集」(京都博物館)、古文書學上からも來由からも珍らしき「天正年間遣歐使節關係文書」(史學研究會)が精巧なる技術に恵まれて一般同致者に頒布せられた。昨年新たに計劃刊行されたものに「新訂増補國史大系」海軍史料(住田正一編)「復古記」大日本地誌大系「校訂延喜式」(國學院大學)「日本風俗畫大成」(中央美術社)藤樹先生全集(内外出版)等があり、前年來配本されつゝある「異國叢書」「日本經濟大典」「新校群書類從」「日本古典全集」「二宮尊徳全集」「六國史」(大阪朝日)「古典保存會本」「海舟全集」等と相俟つて、如何に史料の豊富を加へることであらう。その完成を祈つてやまないのは昨年中「大日本史料」が七ノ二後小松天皇自應永二年四月至應永四年十二月、八ノ十四後土御門天皇自文明十四

年正月、至同年十二月。「大日本古文書」が十八、自寶龜元年九月、至寶龜四年十二月が刊行され、史籍協會より「朝彦親王日記上下」「木戸孝允文書第一」「大久保利通文書第十」「遣外使節日記纂輯第二、三」「藩制一覽下」「嵯峨實愛日記」「橋本實梁陣中日記」が出でた事は我々をして如何に力強さを覺えしむるであらう。

雜誌に於て新史料の紹介、解題されたものとしては「國語と國文學」の新資料の研究の特輯號のあつたのを始めとして「北野神社記録」(三浦周行、京都史蹟)「異國日記」(辻善之助、史苑)「吉野朝時代の新史料としての寫經」(大和吉野郡川上村大字東川、運川寺所藏、大般若經六百卷の)「奥書」(上田三平、考古學雜誌)「鎌倉松ヶ岡東慶寺御寺法寫」(歴史地理)「中野堀江家文書」(高味良洪、同誌)「元寇防壘長門國石築地に關する史料」(出雲大社)「相田二郎、同誌」(上野貫前神社文書)「橋村博、同誌」(北畠顯家の上奏文に就て)「醜齋寺三寶院文書」(黑板勝美、同誌)「安南普陀山靈中佛の碑について」(同人、史學雜誌)「和蘭國立文書館に存する日蘭通交史料、特に商館日記について」板澤武雄、

歴史地理)「和蘭に於ける維新史料」(同人、明治文化研究)「ふせやの物語に就いて」(桑田忠親、國學院雜誌)「古事記の眞福寺本によつて或は正さるべき事」(中島悅次、同誌)等を擧ぐるに止める。「寺尾」

朝鮮史 特に一般的研究を云ふべきものは見當らず、分類の當否は難しいが先づ特殊問題としては朝鮮人の間に開國の神人として崇ばる檀君考(今西龍、青邱說叢第一冊)があり、往年發表された處を更に精述したもので、一然をして遺事の卷頭に収録させたのは當時夷狄の遼金元が中國を歴し箕子尊崇の念は下火になり乍ら此等夷人に對して心服し得ぬを云ふ時代精神の力であり李朝に入つては此傳説は國家に根を下し史的關係に於て尊崇さるゝに至り、遂には別種の傳説の附記によつて廣く朝鮮、新羅、高句麗、南北沃沮、東北扶餘、濊貊に君臨したものと變じたが、明との關係によつて箕子尊崇に壓倒され、近年に至つてもはやさるゝに至つた次第、更に日本に於ける素尊即檀君説にも言及して居る。新羅人の武士的精神について(池内宏、史學雜誌)は、六世紀より七世紀

に互る濟麗同盟による一〇〇年の難關を如何にして切り抜けたかを新羅人の精神生活の上から考へたもので、其他百濟の舊都熊津に於ける西穴寺及南穴寺址（輕部慈恩、考古學雜誌）、朝鮮樂制の變遷（岩谷武市、朝鮮）高句麗式（思はる、義山里石塔（大原利武、同誌）朝鮮における神話的婚媾（李能和、同誌）がある、歴史地理方面では先づ屢々論争をくり返された眞番郡考（李丙謙、史學雜誌）が從來の北方南方兩説を斥け漢の帶方郡の故地であること見、公孫氏の帶方郡設置と曹魏の樂浪帶方二郡（池内宏、史苑）は、屯有縣以南の荒地と云ふのは荒涼の意味ではなく夷狄に占有されて秩序の亂れた形容であることし、帶方新設後の韓人朝貢管掌權、更に其所置に伴ふて起つた韓人の叛亂を説いて居る。列水が大同江である事は列口、王險城黏蟬縣の位置からみて確實で、高句麗が平壤に都した後の支那文獻に此を涓水としたのは支那文字の土語征服である。尤も同時に此を涓水書いてエミよんだのは事實であるが此は涓の朝鮮音 *Wien* から來たもので却つて列水たるの證であることする空格なし列水考（今西龍、朝鮮支

那文化の研究）は、列、樂浪、の名稱も共に古くよばれたラ行音をナ行音に改めて川と云ふ意味の語をあらわしたもので、衛氏滅亡の際にみる尼谿は涓字の頭音をナ行に變じて呼んで居る地名の假名ではないか云ひ、又樂浪郡治の所在地については、大同江面の土城址は最初からの郡治ではなく別城で、後漢末晋初頃江北から遷つたものと述べて居る。文字上より見て同一河川の如く思はる、百濟の白江と白江口（白村口）について（山口照吉、歴史と地理）は、實は異つたものと見るべきで、前者は錦江の下流、後者は周留城の位置と關連して考へられ、今の東津江だらうとの事である。次に儒學文字の方面を見るに麗末鮮初の儒學の文字として朝鮮現存の最古の圖説であり後人への影響も大きい、權陽村の入學圖説に就て（李丙謙、東洋學報）は、著者の學統、經歷、著書、各板本、内容等を詳述し、性理學輸入即ち哲學準備時代に既に此の如きもの、現れた事を奇しし、降つて李朝儒學史に於ける主理派と主氣派の發達（高橋亨、朝鮮支那文化の研究）は、學理論の二大學派間の四端七情理發氣發の討

議、即ち退溪、高峰、栗谷、之に續く嶺南、畿湖、農畝諸派の四七説を明にし、更に日本崎門派と退溪の關係にも及び、清朝文化の核心を捕へた金正喜を描き出す爲の序幕とも見るべきは李朝の學人、乾隆文化（藤塚郷、同）で、事大使臣の隨行乍ら毎年入燕し得た權域學者の燕行録によつて、觀點を乾隆時代におき、其北京に飛躍した狀況と其もたらした土産の何物であるかを述べ、半島學壇が此奎運に促された功は入燕諸公に歸すべしと云つて居る。又、朝鮮文學史（多田正知、斯文）は續いて書かれる事と思はれる「歌謠と舞樂、神話と傳説」等と合せ上古文學史を成すもので、三國時代に於ける三教の東漸、及び其消長を述べたものである。政治社會方面には高麗妙清の亂について（瀬野馬熊、東洋學報）があり、遷都運動を叛亂に迄押し進めた根本動力は由來する處の深い西京の開京に對する不斷的反抗で、其要素は五條あり此反抗が如何して反亂の動力となつたかについては後に書かれる「此叛亂と高麗廷臣間の抗争」をまつて明になる。元の官職で總督知事等を意味する蒙古語をう

つしたもので、元宗十一年に創置され忠烈王四年やめらるゝまで高麗に駐在した元の達魯花赤について（池内宏同誌）は、總督と云ふ程の權勢はなく、内政に干渉せず大抵本國朝廷の命にしたがつて處理した、云はゞ目付とも云ふべきもので、高麗、日本經略に大關係があり乍ら組織は勿論其廢立年次さへ不明であつた元の征東行省に就て（鴛淵一、大谷學報）は、至元十一年設置以來百餘年間變遷をへて、元室北走後も尙一時存し、高麗滅亡と共に自ら廢絶した次第を遺憾なく描き出して居る。新羅の奇俗花郎制度に就て（三品彰英、歴史と地理）は、眞興王三十七年の制定と見ゆるが新定ではなく古俗の發達又は變化したもの、様で、其服飾歌樂等からみても原始宗教的であり、原始花郎制度は儒理尼師今時代の嘉俳に比すべきものと思はれ、四仙傳説との關係、花郎の名稱考、後世如何に變化したかにも及び、朝鮮家族法管見（稻葉岩吉、東亞經濟研究）に於ては現代朝鮮人の全生命とも云ふべき家族主義の發達は、高麗末以前には遡る事が出来ず、それ以前は佛教寺院の文化占斷によつて侵入を妨げ

られ、儒教の發展と共に輸入され明に服屬し明律を採用するに至つて強固に赴いたと見て居る。更に言語文字史料の方面に轉ずれば、先づ洛陽北邙山附近より發見した泉男生男産及び高慈の三墓誌について述べた、讚碑札記の中より(内藤虎次郎、支那學)があり、大唐平百濟國碑に就いて(金允經、史苑)は碑銘を刻したのは唐人だが、塔は百濟人の手になつて既存したとの理由が擧げられ、更に内容は三國遺事と同一の記事であり乍ら、別に眞淨國師の海東傳弘錄を引いて遺事によつた迹の見當らぬ點から、一然以前の著作と思はるゝ釋了圓の法華靈驗傳について(稻葉岩吉、史學雜誌)の研究があり、高麗史に見えたる蒙古語の解釋(白鳥庫吉、東洋學報)は、四十三語に對して一々考察を加へたものだが、主として現在の辭書により又女眞語への考察が重んぜられてゐない様である。九百三十年前遼の統和十五年に著作された字典高麗版龍龜手鏡解說(藤塚鄰、斯文)は、遼版の眞面目を窺ふ上に如何に重要なかを宋版との比較によつて見たもの、李朝に入つては、朝鮮國來書簿、奏疏稿等と一緒に奉天崇

謨閣で發見され、共に實録の闕補を補ふ點の少くない、各項稿簿(市村讚次郎、史苑)が出たのは喜ばしい事で、尙他の二者も早く發表されん事を祈る次第である。總督府藏書中にある太白山史庫舊藏の草本光海君日記(稻葉岩吉、史學)は廢主の罪案の當非滿鮮關係の危微等を知る上に於て無比の資料で、實録纂修の事情を明にし、當然廢棄さるべき中草本が珍らしくも保存された事は、兩度の滿洲侵入によつて速に史局を了り結末を見様とした事、及び西人が大北を併し權を專にした事情を物語つて居る。西洋人によつて蒐集せられた早い時代の朝阪語彙(小倉進平、朝鮮支那文化の研究)では一八七四年 Point Ⅲ がロシア朝鮮語對譯辭書を出版する以前に於ての模様、即ち最初に彼等が蒐集を企てた動機、其範圍、資料の傳承、系統を明にし、其語彙を掲記し註解を施したもので、之によつて古い朝鮮語の姿を伺ひ、又其赤裸々な寫出によつて當時の發音の特質方言の分布を研究する有力な資料たり得ると思ふ。終に小倉博士著鄉歌及史蹟の研究について(前掲恭作、史學雜誌)のあつた事を附記し

て置く。内鮮關係になるに近世に於ける日鮮交通史の前提として知る必要ある李氏朝鮮時代に於ける倭館の變遷（小田省吾、朝鮮支那文化の研究）を其六小期に存在した館の發生消滅を中心として述べ、中就通文館志、倭館始末に見えない絶影島倭館の存在を認めたのが注意を引くが其他日鮮史話（松田甲）中には、駿河の清見寺に朝鮮信使以下多く徳川時代の朝鮮關係の事が收められて居る。美術工藝方面では、李朝の黄金時代、世宗朝第一の畫家で北宗人の骨法を得たミニ云はる、朝鮮安堅の夢遊桃源圖（内藤湖南、東洋美術）が見當るのみであるが、旅行記の中朝鮮紀行（五台山月精寺附上院寺）（天沼俊一、東洋美術）浮石寺に法住寺（同人、佛教美術）は、共に朝鮮古建築の研究である。其他には三國の佛像佛典宗旨等に關した朝鮮佛教視察記事（西光義達、龍谷大學論叢）慶州に佛國寺（石野瑛、考古學雜誌）、朝鮮見學感想記（京大史學科、歴史と地理）等を擧げる事が出来やう。（今石）

東洋史 最近に於ける支那學の發展は實に目醒しいものがあり、前代未聞ミニ云つても敢へて誇大ではないミ

思はれる。勿論其根底に清朝三百年の考證學の進歩があり、其背後には歐米風の科學的研究法がある爲であるミは云へ、其原因は前人未踏の newly 發見された貴重な資料が應接に達しない程相繼いで學者の机邊に殺到した事によるミニ云はねばならぬ。最近に於ける支那學の展望（石田

幹之助、思想）は此新資料の主要なものを、一、所謂殷墟に於ける龜甲獸骨文字の出土、二、支那の西陲に於ける古文獻古美術古器物の發見、三、北平に於ける清代内閣大府庫舊藏に係る元明清間の古文書古記録の發見、四、蒙古の北部並に西部に於ける古碑の發見、古冢墓古城址の發掘、五、支那各地に於ける秦漢隋唐間の古彫刻古墳墓等の精査又は其新發見、並に山西河南等に於ける石窟寺の發見又は精査、六、北支那に於ける新石器時代及び舊石器時代の遺蹟遺物の發見、七、河南省新鄭及び孟津等に於ける古銅器其他の出土、八、滿鮮に於ける諸發見、特に朝鮮に於ける漢民族の古墳の發掘ミ棺槨壁畫副葬品等の發見、の八項に大別して、其初の數項については概要を紹介し併せて之に基く内外の研究成績を略述し、支那

學の新聞題、したがつて東洋史の研究の對象たるべき方面を明にして居る。現に後に述べる原史時代文明に關する研究が近年著しく盛なものも、此狀勢を如實に示した一例と思はれる。方面は全然別なるが、古代に於てインドに侵入したアーリヤ族の使用した言語サンスクリットの中には、古代印度北部を占領したモンクメル語族の單語が混合して居るに云ふ佛人ブシルスキイ氏の興味ある研究、及び從來殆んご失敗に終つて居た舊世界と新世界との言語の間に於ける連鎖をうち立てんとする佛人リヴェ氏の企圖が、歐洲人の極東研究(松本信廣、史學)によつて紹介されたのは、よし其結論が蓋然性を帶ぶるに云へ、將來研究の方向を暗示する創意的の好研究なる事によつてあらう。尙漠然たる標準ではあるが、政治經濟社會の諸問題を重點として、最近十年間に於ける支那に關する英米文獻(松方三郎、思想)が出たことは、支那革命に關するロシア書(經濟批判會、同誌)一九二〇年以後に於けるドイツ語文獻(支那問題調査所、同誌)支那語で書かれた文獻(同、同誌)と共に最近の問題をみるに便

利であらう。更に又最近の歐米支那學界を語るものにして歐米支那學漫談(今村完道、斯文)があつた。

支那史即中國史、支那の原始時代文明に關する研究は年を逐ふて愈々盛になり昨年の東洋史學界に於ても最も注目に價する。漢代藝術に於ける雲文(ロストツエフ著、榎本龜生抄譯、歴史と地理)の如き變化を支那雲文の發展に對する一般的なギリシヤ藝術の影響をみたものもあり、神話傳説の色彩があまりに濃厚な爲に、從來の支那學者に輕視されて居た經史以外の先秦史料、即ち山海經、逸周書、穆天子傳等を含む地理上の知識は貴重なるもので、これによつて當時の支那民族に知られた世界の範圍は西北方に於て随分遠い事が判るに云ふ。歴史地理學上より視た東亞文化の源流(小川琢治、思想)は、石器、金石並用、金屬器の三時代に互つて、先づ北方から夏人、次に西北から殷人、最後に同方向から周人が移住したもので、其原因は寡雨による生活の不安定に云ふ中央アジアの地文關係を根底させねば理會し得ぬに述べてゐる。此の如く先秦時代の支那に於ける西方文明の影響(アンリマスベロ、史學雜

誌)は注目され從來支那文明獨立をみるのは斥けられ外來の文明が想像以上に屢々影響を與へたこの考は納められたが、支那文明の始源(同人、支那學所載、向井章譯、東亞經濟研究)は、此文明がたゞこ影響をうけて居るにせよ、西洋人が其起源を舊地中海文明に求むるのは先入見であるとし、他方久しく支那人が誤解した昔の地理的範圍を認識する必要ありて、其土地開墾、家屋、農業の狀態等遺憾なく描出し、周圍の蠻族との關係に及んで居る。其中萊夷、徐夷、淮夷等云ふ山東の古代住民(那波利貞、歷史地理)は、泰山々彙が未だ島嶼の頃から居住した原住民で元來夷云ふのは東方の未開族を指す語ではなく、辮髮の俗ある蠻人の意味らしいから、此等の人種的系統は漢族とは別派であつて、其開化の程度も必ずしも漢族に都合よく書かれた古書の記載の如く未開であつたことは限らぬ。徐夷が西方の新沃野に發展したと思はれないのは、周の東進云ふ民族運動に扼止されたものと解すべきで、周が近親功臣を齊魯に封じたのは其懷柔策のみられ、それ以後の彼等は常に悲痛な生活状態におかれ周

に同化せずシャーマニズム等の特別な風俗を保持したらしい。漢族の山東移住が盛なるに伴ひ彼等は南方江蘇浙江方面へ流出したが秦漢の際我國へ達した支那人の多くは此等徐夷萊夷の子孫ではあるまいか云ふ説は面白い。前年より引續く五車一得(中島棟、史學)は、夏殷より周に至つて金銀を用ふる事は益々多くなつたが、周の中頃迄は決して今の所謂貨幣に鑄造した事はなく、管子に黄金爲中幣とあるが、幣は恭敬の心を伴ふ禮物のいみで通貨ではなく、又變化を意味する交換の目的物たる貨と混すべきではない事を力説して居る。次に年代學的研究と密接不離な關係のある古代天文學研究の方面では古代史研究を最も困難ならしめる支那古典の年代に就て(新城新藏、史林)支那上代に於ける天文曆法の發達研究の結論から逆に一々仔細に内容を吟味し若干の古典、殊に春秋と左傳の成立が前者は其全體が紀元前七百二十二年より四百八十一年迄、後者は其大部分が戰國の央、紀元前三百五十年頃であること主張し、天文曆法に關する方面から見た上代天文の研究(同人、支那學)によつて、古銅

器の銘文中に曆日の記載あるものをこり、其記載の間に何等かの秩序脈絡を求め、それを利用して銘文の製作年代を判別し様々試み、櫛古録、周金文存以下に材料をこり百八十一の銘文を對象とし、既に金石文以外の文獻によつて研究し得た知識に基く若干の假説に對應して分類し其當否を検した結果、曆日記載の最も完備したものは周王歴代の一々について其適合を検し、康昭恭厲四王の在位年數を決定し、五十個の銘文を春秋以後二十個を春秋以前に斷じ、十二支古法の用ひられたのは宣王時代迄であらうとみて居る。支那の古曆に曆日記事（飯島忠夫、東洋學報）は書經其他に見る霸の意味を批判して月光であるとし、既生霸等と書かれたのは總て月の盈虧の状態に名づけたもので、此生霸死霸を用ひて記された武成篇の曆日は前漢末に製作された不精密な劉歆の三統曆以外では説明ができず、又武成の曆日に關し之を説明し得る國語中の材料も三統曆に一致するから、紀元前千百年頃に於ける實際の記録とは認め難く、此等の曆日記事を本として立論された周初の年代は誤で、只孟子に記す所に

よつてそれより以前七〇〇年、即ち紀元前千餘年と推測されるのみである。始皇二十六年から武帝太初元年迄百十七年間用ひられた顛項曆の性質を研究すれば黃帝曆、夏曆、殷曆、周曆、魯曆と同じく七十六年を小週期とする事は其本源が一種で、それに多少の調節を加へた結果色々な曆が成立した事を示し、此週期法が東西同時に成立したのは偶然とは考へられず、又所謂春秋長曆の性質を注意すれば此中に自發的發達の道程が示されて居ることは思はれぬと論じ、黃帝傳説と堯舜傳説を比較し堯典の羲和の記載によつて其區分を見、後者の成立は神話の性質を脱却し様々努力した歴史への飛躍で、此際支那文化に急激な躍進があつたらしく、曆法も五行説も此時の產物で其時代は戰國と思はれると云ふ、支那曆法の起源に關する傳説（同人、史苑）と共に、西方の影響を強調してゐる。（以上、今石）

例に依つて、周以後の諸代に關する事項を一括する。先づ政治史方面。三千年前の國勢調査（武市定七、斯文）を題する一篇は、周代の比に關する研究である。比には

大小の二種があり、小比は毎年四期、大比は三年に一度の割で行はれた。その施行區域は畿内の全部と邦國に限り、夷・鎮・藩の三服は除外されてゐた。その内容は、宮中調査・群臣調査・庶民調査の三種に類別することが出来る。而して、その目的は、その成績を以つて、王門内の政令の基本、設官賞罰俸祿の基本及び軍備編成・徵集準備・選士治績なき諸政の基本とするに在つた。云ふまでもなく、三千年の昔に、早くも斯様な制度の存在したことは、他地方との對比に於いては全く一つの驚異である。而も翻へつて考へるならば、此の制度の如きは、極めて多面的な周代文化の一小面を現示するに過ぎない。従つて、今や我々の興味は、現在、周禮の中に昇化集約されてゐる周代の文化が、果して如何なる經路を辿つて成立したかの點に向けられねばならぬ。而してこの問題に關しては、周禮文化の成立略考(丹羽正義、歴史と地理)が明答を與へるであらう。一體、殷周の革命は、夏殷のそれは趣きを異にし、黄河のデルタの地方の古い社會との社會以外の新興の民族との間に行はれたものである。

勢ひ、周の革命達成の活動は、決して容易ではなかつた。しかも此の容易でなかつた事が、却つて周人を驅つて一つの統一政治的活動に入り、所謂周禮の文化を創造せしめるに至つた。此の統一政治的活動の端を開いた中心はもよよりの周公旦である。たゞ、此の際注意すべきことがある。この統一政治的活動の規制化的表現としての周禮の文化が、決してそれに先在する一つの理想一つの價值を具現したのではなく、單に自然の必要によつて生じたものである事、これである。この活動は、昭穆の世を極盛とし、宣幽の世に至つて衰へた。しかも周禮の文化が、一つの價值として考へられ始めたのは、却つて此の宣幽時代からである。即ち周は此の頃になつて初めて、前代には曾て經驗した事のない夷狄の壓迫を蒙つた。この事は、殆き不可避的に、周人を往代盛事の追懷のうちに追入れた。そして、この追懷こそ周人をして、統一政治的活動の價值の自覺に到達せしめたのである。尤も現實の世界で斯様な自覺された價值が、實現され、發展せしめられるに至つたのは、春秋の世に入つての後のことである。

あること云ふ。そこで春秋時代に入る。この時代の政治史上に於ける特異な現象の一つは諸侯の會盟である。會盟には御承知の様に「執牛耳」^ミいふ古典的な盟禮を伴ふ。

この「執牛耳」は、後には一つのイデオム^ミなつて、「主盟」^ミ同義に使用されるに至つた。しかし、元來、牛耳を執る者は、會盟當事者中の尊者であつて、尊者は唯、牛耳に洩むに過ぎない。今執牛耳考^{〇〇}（菅谷軍次郎、斯文）に據るに、先のイデオムとしての執牛耳の意味は、執牛耳者の身分の尊卑には關係なく、單にその行事の盟禮上に於ける重要さに由來するものである。又その牛耳を執る理由は、牛耳には筈の無い事^ミ、耳を重んずる習俗^ミに依るのであらうこと云ふ。さて次には、國家政策としての屯田の性質の變化を主題とした論文を紹介したい。この問題に就ては夙く宋の王應麟が、「大抵漢之屯田以兵、唐之屯田以民。歷代或民或兵、蓋不一也」^ミと説いてゐる。而して、我が岡崎氏は、魏の屯田策（岡崎文夫支那學）こそ此の變化の端緒をなすものとする。由來屯田策の實行は、漢の宣帝の時、かの趙充國によつて完備さ

れた。しかも充國の屯田策は、全く對羌の方針から割出されてゐた爲めに、土地の耕作に従はされたのは、皆、その新殖民地防禦のために派遣せられた戍役の者であつた、この「以兵屯田」が漢代屯田の一般の特徴をなす。翻つて魏代の屯田は、その草創の際、——いふよりは寧ろ漢末の動亂期に裴祗の獻策によつて行はれた。もこもこ是れは、「民を募つて屯田させる」のが、その根本方針ではあつた。しかも、その施行の實狀から見れば、それは猶、後世の様な、純然たる「以民屯田」^ミは認め難い。何となれば、先づ當時の紛亂した世態・空乏に歸した戸口状態はそれらの自發的乃至は強制的に募集された人民に、守備・運糧等の本來附帶的性質の義務をも背負はせる、結局、事の主管者^ミしても、彼等^ミにその義務を遂行させる必要から、彼等を、軍隊の部營の制度によつて拘束せざるを得なかつたからである。併し、やがて魏の國家統一の完成と共に、その兵制的要素は不要となり、屯田も其のもこもこの姿に立歸る傾向を示して來た。蓋しこれ、氏が魏の屯田策を以て前掲の問題に答へようとする所以

である。遙かに時代を下つて、近世史・近代史の領域に入るに、先づ猛安謀克金の國勢（鳥山喜一、朝鮮支那文化研究）との相關關係を論じたものがある。金の猛安謀克の端緒は、夙く其の建國以前の完顔部の部落生活の中に兆す。そして、その形成は金の宗室の軍事的勃興に伴つた。猛安は、女真語の Ming-an（千）の對音、千夫長の謂ひ、謀克は Muke 又は Mukun（郷里）のそれ、郷長邑長を意味し、義をこれば百夫長に當る。いづれも元來は、これらの將校其者を表はし、ついでは、また、それらに率ゐられる軍隊をも表はすことになつた。以上は、猛安謀克の起源と語義とに關する所説の概略であるが、著者は、更に其の職分にも論及してゐる。そして、稱呼の用例の上から、これを三様に分類する。（一）將校及び軍隊としてのも、（二）地方區劃名及びその長官としてのも、及び（三）榮爵としてのもが其れである。この點は、曾て、箭内博士が、この稱呼には、屯田軍としての、將校としての及び榮爵としての三様の意義ありませられたもの、稍々その所説を異にする。最後に著者は、金

室のこの猛安謀克に對する配慮を（イ）世宗以前の事情、（ロ）世宗朝に於ける措置、（ハ）世宗以後の情態の三項に分つて詳述してゐる。著者に據れば、その配慮は極めて深甚なものであつた。その然る所以は、固よりその發生の歴史的な事情、民族的な原因に基くものであるがその結果は、却つて、彼等の武力的・經濟的の墮落を惹起し、延いては、相因果的に、金國の疲弊を來したといふ。次には元一代を隔てた明代に於ける佛道の取締（清水泰次、史學雜誌）は、果して如何様のものであつたか。初め太祖の宗教熱は、洪武元年に於ける善世・立教二院の設置、同じく五年に於ける僧錄・道錄二司のそれを経て、加速度的にその度を昂めて行つた。しかし、その熱もやがては冷めねばならなかつた。即ち、洪武十五年をさる數年後の頃になると、太祖は却つて僧道及び寺觀の數に制限を加へようとするに至つたのである。この釋道二教に對する清理の一般的な目標は、勿論「僧道の妄りに議論し、命令に叛くものの取締」といふ點に置かれてゐた。併し、これ計りが其の全目標であつた譯ではない。

その他にも、(一) 征徭を避ける事、(二) 僧俗の混する事を妨ぐなごの意味が含まれてゐたのである。この僧道に對する制限は、成祖及びそれ以後には、層一層、厳しくなつていつた。而も、皮肉なこゝには、寺觀僧道の數はその制限の嚴重さに正比例して増加する、また此の増加は先述の取締の主旨をよそにして、益々彼等の風紀上、治安上に於ける亂行を助成する、さういふ仕儀になつて來た。尤も、この僧道の惡化は單に、かうした取締の弛緩ばかりに因るものではなく、度牒の濫賣も亦大いに之に與つてゐる。度牒は成化二十年頃から發賣された。その當初は物納の形式をこつてゐたが、嘉靖年間からは金納のそれに改まつた。斯様に度牒が發賣されるに至つた理由に就いては、饑饉その他の然るべき事情も種々考へられる。しかし、それ等いづれの事情を是であるにしても更にその基底には成化・嘉靖兩帝の崇佛道態度の反影を認めねばならぬ。それは兎も角、明代僧道の精神は、上説、彼等に對する取締りの弛緩につれて滔々として宛途もなく墮落して行つたのである。さて明朝没落の後を承けて、中國の

槍舞臺に乗出したものは、言ふ迄もなく滿洲民族である。次には、この滿洲民族に關する兩方面の觀察(稻葉岩吉 東亞經濟研究、未完)の一部——文化方面に對しての所説を聽かう。周知のやうに、滿洲民族は、その政治の系統をば國族及び外族の兩者に區分し、各々その民族の慣習に據つて政治を行つた。この所謂二重體系の政治は、もご契丹人によつて創始され、それが遠く滿洲民族の間にも傳承されて來たものである。然らば、この政治體系は、清朝に在つては如何様に推移したか。元來、清の太祖・太宗には、漢地を占領して其の地に國族を移さうと云ふ様な考へはなかつた。この間にあつて、この二重體系の政治が、殆んゞ完全に持續されたことは言ふまでもない。繞く順治帝の時代に至つて、かの北京遷都の決行を見た。しかしこれまでも實は流賊による明室の覆滅さういふ突發的な事情に動かされただけのものに過ぎない。この意味に於いて、北京遷都は必しも祖宗の意志に副ふ所以ではなく、何れか云へば、時の勢ひであつた。而して、かく滿洲人が、時の勢ひに押されて、從來未經験の漢族統治に

直面するに立至つた事態は、爾後の二重體系の政治の推移に對して、微妙且つ至重な聯關をもつ。先づその定鼎當初の様相を見よ。それは何よりも彼の順治帝の遺詔が明證する。即ち上は漢俗尊重・漢人偏用の風に墮し、下は漸習漢俗の軌を踏むといふのが、その有様だつたのである。もごより、これは單に文化程度を異にする兩民族の無規制無用意の下に於ける混處が豫想する類型的様相の一事例であるに過ぎない。しかも、既にこの様相の間には、滿人の政治體系を推轉せしむべき別箇の動因が胎まれてゐた。滿洲八旗の志氣の弛緩がこれである。事の真相は、康熙間、吳三桂の亂に當つて完全に曝露された。この結果として漢人の地位は——先づ武力の上からではあるが——規制的に重視されて來たのである。然るに次の雍正時代に入るに、いはゆる會靜事件の勃發を見た。會靜は説いた。君臣の關係は重んずべきまでであるが、更に大なるものは華夷の別、即ち攘夷でなければならぬ。これ最も端的な反清思想の表現でなくて何であらう。帝は、これに對し、親しく大義覺迷錄を著して華夷中外の

分論あるを得ざる所以を説いた。帝の駁論の效果如何は別ごする。たゞ大局の上から見れば、滿洲朝廷の二重體系の政治、また其處に源を發する滿漢對立の思想は、今や、漢人からの思想的脅威を受けて、脆くも破産の危機に瀕した譯である。爾來雍正帝は、一方には、國俗の保存に努め乍らも、他方には、滿漢破除の見解を執つて、益々漢人偏用の實に傾かざるを得なかつたのである。此の最後の清朝の國粹保存政策に就いて(浦廉一、史學研究)は、また別途の研究がある。著者は云ふ。滿洲民族が中國に君臨するに當つては、表面上は滿漢一體を標榜してゐたがその實裏面に在つては、周密な企劃の許に、滿厚漢薄の用意を藏してゐた。滿漢一體の標幟の不可缺性は、彼等の中略略取のまきに當つて、漢人の力を多分に借用した事實、又彼らが漢民族に對して文化上の劣位を自覺してゐた事實によつて理解される。それと同時に、滿厚漢薄の用意の必要であつたことも、塞外民族の中國統治の失敗の歴史に徴して明かである。本篇は、この滿洲王朝に課せられた二つの相矛盾する政策の中、後者即ち滿厚

漢薄主義の現はれを、皇子の教育・帝王の修養乃至は國語並びに武力の維持策・種族保全策・滿漢待遇上の差異・風俗習慣信仰等の維持・その發祥地の保護なごの諸々の視角から研究したものである。進んで法制史方面に轉ずる。一體、支那法制史上最も重要な位置を占める時代は、申すまでもなく唐である。然るに、その唐の律令格式の書は夙く散佚に歸して現在に傳へられてゐるものは僅かに唐律疏議があるばかりである。近時、いはゆる西域の流沙石室の中から、唐代の職官令・公式令等の書も發見されたが、それらは何れも斷簡零文であるに過ぎない。従つて、唐代の令格式は、今迄の漢籍に在つては、唐六典・唐會要・通典・通考・冊府元龜・玉海・御覽・白孔六帖等に逸文を存する以外、殆ど全く傳はらないと云つてよい。ところが今、我が令集解に見える唐の法律書（瀧川政次郎、東洋學報）を以て、永徽律疏・永徽令・開元令・僧道格・垂拱格・開元格・開元式・格後勅・法例・判集・唐令私記・唐令釋・紀氏傍通・張私記・宋私記等の書名を挙げ、これらの一々に就いて、その所引の章句を摘記し、且つ又、こ

れらの一々に對して詳しい文獻學的考證を加へた研究論文を獲たことは、斯の方面の研究者にまつては誠に喜ばしい次第である。なほ、本篇は進んで日唐の法律學の交渉にも論を及ぼしてゐる。次には社會史的方面。家族制度度並びにそれと關聯する事項に對する研究は、流石に數が多い。先づ西山氏は、前漢書の地理志に現はれた齊の巫兒の俗は母系乃至母權制度の痕跡なるか（西山榮久、東亞經濟研究）の設問に答へて、次のやうな意見を發表されてゐる——惟ふに支那の家族制度が父系・父權の制度であり、その婚姻制度が同姓不婚であつたことは之を承認して可なりであらう。この點は諸學者の説も考證上積極的にほぼ一致してゐる。これに反し、支那の古代に果して母系乃至母權制が存在したか否かの問題になる意見が二途に岐れてゐる。即ち、或る人は其の存在を主張し、或る人は、あつたかも知れぬが、史上には確實な證左を得られないと云ふ。勿論、これらの兩説を以て、其の存在を否定しない點に於いては、謂はゞ消極

的な一致をもつ。従つて、こゝで此の問題は、斯やうな
兩説が何らかの確實な資料を以つてして、積極的に合致
せしめられはしないかの疑問に歸納されねばならぬ。此
の疑問を念頭に置いて、諸書を檢索したところ、前記、
漢書地理志の記事を見出した。元來、齊といふ國は、家
族制度に關して特異な風俗を傳へたる所である。血族
相婚の如き、又、今問題とする巫兒の俗の如き皆これ
である。巫兒、恐らくは巫女的一種。齊國では、民家の長
女が凡て巫兒となつて一家の祭祀を司り、殆ど家長たる
の地位を占めてゐた。彼女等は一生出嫁せず、子を擧げる
爲めには、その配偶として贅婿を迎へた。これ明かに母
系乃至は母權制度の痕跡である。而して此の風俗は、必
しも記事の文面通りに襄桓の頃に始つたものではなく、
却つて古代山東地方のそれが、當時まで殘存したものと
解せられる。更に臆測が許されるならば、齊國の人民は、
元來純粹の支那人ではなく、滿洲方面に住んでゐた東夷
ミカ東胡ミカの血統を引いたものかも知れず、従つて、
其の巫兒の如きも、それらの諸族の間に行はれるシヤマ

ン教にいはゆる當家婦や好女子に當るものも解し得ら
れぬではない。最後の所説の是非はともかくとして、齊
の巫兒の俗から推せば、古代支那に母系乃至母權制度の
存したことは、明確な事實である——こゝ。なほ、この研
究的部分的な論旨に對しては、既掲の山東の古代住民(那
波利貞、歴史地理)を参照されたい。次には舅姑甥稱
謂考(加藤常賢、朝鮮支那文化研究)がある。これは舅頭
「甥ミは何カ」といふ根本的な命題を設定する。語の使
用され得る極大範圍の意味に於いて、甥には二類四種の
ものがある。異代者間の稱謂としての甥は Nephew の
甥ミ Sont-law の甥ミを斥し、同代者相互間の稱謂とし
てのそれは Cousin の甥ミ Brother-in-law の甥ミを現は
すといふのが其の答解である。そして著者は、これを證
明するために、(一)舅姑ミは何カ、(二)舅姑ミ甥(異代
者謂稱)姪婦の關係、(四)春秋に現れたる婚姻型相、
(五)婚姻方法ミ甥舅姪姑の稱謂の各項に互つて、詳細な
考證を行つてゐる。さて、支那の家族制度をよりよく理
解する上に必要なものの一つは支那民間の Infanticide

つ。いて(西山榮久、東亞經濟研究)の知識である。そもそも支那に於ける幼兒殺しは、戰國の頃までは、特殊の場合を除くの外、殆んき行はれなかつた。韓非子に至つてやうやく産女則殺之した事が見えてゐる。本篇は主として、其の現狀の闡明を目的としたもので、その意義・その方法・女兒殺しの多いこと・行はれる地方・該犯行に對する支那人の見解・國法等の諸事項に就いて説くところ極めて詳密である。更にその原因として挙げられたものは、迷信によるもの、孝道によるもの、飢餓によるものを初めとして、十有三箇條の多岐に亙る。因みに支那の幼兒殺しに特に女兒殺しの多いことは周知の事實であるが、著者は此の現象をば、支那女子の家族制度上に於ける位置から説明しようとする。それは、何れにしても、斯様な習俗が社會狀態に對して大きな影響を及ぼすことは云ふまでもない。男口数が女口数より多いこと、支那の人口狀態が靜止的であること——著者はこれらの現象を以て、皆この幼兒殺しの惡影響に歸する。又、この溺女の俗は、延いて勞働問題にも至重の關係ありとす

る。そして最後には、之が救濟問題を論じてゐる。なほこの多方面に亙る西山氏の「支那民間のInfanticide」を讀みて(會我部靜雄、同誌)、その稍々不完全に思はれる部分を補足した一篇がある。第一、溺女の意味。清國行政法には「溺女トハ所生ノ女子ヲ河海ニ投ジテ溺死セシムルヲ謂フ」ニ定義してゐる。併し少くとも宋元時代には、女兒を水盆・溺桶なぎの中に容れて、冷水を以つて之を溺殺するのが、溺女の一般普通の方法であつた。第二、この問題に對する政府の對策、殊に宋代。この時代には、種々朝廷から嚴禁もし、又救濟方法をも講じた。しかし長年月の間に醸成された國民性を一朝一夕にして拔去ることは、固より不可能である。のみならず、朝廷は一方に於いては、依然、その重大な原因とも認むべき苛政をやめず、寧ろ、末期に近づく程、益々太しい有様であつたので、それらの對策たるや、何等の効果をも齎さなかつたこと云ふ。同誌に見える共妻租妻の支那土俗(澤村幸夫)に關する調査報告も、至つて興味深い資料ではあるが、その内容の紹介は略して、直ちに、社會制度關係の

論文に移らう。これには先づ南朝貴族制の起源並に其成立に到りし迄の経過に就ての若干の考察（岡崎文夫、史林）がある。貴族制度は兩極的な隔りをもつ奴隸制度に關してもまた兩三篇。順序として字義から初める。奴の字の説文に就いて（瀧川政次郎、歴史地理）の解説。著者は夙く大正十一年の史學雜誌に「奴の字ミ夜都古の語義に就いて」の研究を發表して、奴は女子を捕獲せんとして手を加へる義から起つた會意の字、恐らく、支那で奴の字が製作された時代には、征服者は被征服民の男子を總て殺戮し、女子のみを奴隸とする習慣が存したものであらうと結論したが、たまたま唐書の韋雲起傳に之を證據だてる記事を發見して、ここに紹介されて居る。支那の奴隸制度概説（西山榮久、東亞經濟研究、未定）は民國の梁啓超氏の研究を基礎として、それに獨自の見解をも加へたもの。名稱、起原及生因、私奴の發生、漢代官奴の激増、奴婢に對する對策、佃客、部曲、其他の奴隸の諸項に分たれてゐる。これに、ほほ同性質のものに唐の賤民制度ミその由來（玉井是博、朝鮮支那文化研究）

ミに關する研究があつた。その第一章に於いては、官賤民（即ち官奴婢・官戸・雜戸・工樂・太常音聲人）ミ私賤民（即ち私奴婢・部曲・部曲妻・客女・隨身）ミに大別される、唐代各種の賤民の個々に就いて、その性質、その社會的の待遇、その法制上の身分を究め、進んでは彼等相互間の身分關係を明かにし、第二章に入つては、その制度の由來を尋ねてゐる。以上舉げ來つたところは、多くはこれ硬化した過去の事實である。今は纏つて、生新しい革命支那の姿に直面しよう。我々は其處にも亦數多い社會史的の乃至は社會學的の考察を見出すであらう。支那革命史概論（藤野啓次、思想特輯支那號）支那革命ミ農業問題（平田良衛、同誌）支那最近の思想運動（藤枝丈夫、同誌）革命支那の一斷面（團田次郎、同誌）などがこれである。これらの梗概は今省略に従ふ。たゞ、この項の最後に當つては、行きすがりのエトランジェの氣持ちに映る支那人の特性（和辻哲郎、同誌）を述べよう。見た所、日常の仕事に於ける彼等は、それに附隨する可能的な危險を恐れて、豫料的に心を惱すといふ様なこゝは殆んごな

い。従つて、或る可能な事に對したときの彼等は實際的には極めて恰憫でありながら、感情的には、至つて無感動である。この無感動的な性格はさこから來たものであらうか。それは勿論、其の無政府的な社會の情勢からも説明することが出来る。しかし、これだけがそれを作るものは云へない。單調な空漠さの特徴とする風土的負荷——これこそ、その別途の理解を供するものであらう。次いで經濟史及び商業史の領域に入る。先づ阡陌と井田（小川琢治、支那學）を題するもの。これは、古代羅馬人の土地を區劃する方法が、周禮地官の記載に酷似してゐる事實、又これらの東西文化民族の間には、神廟都邑・耕地の設定の場合に、共通の習慣や信仰やが行はれてゐた事實なきを基礎として、阡陌井田の本性の發生的意義を明かにしようとするものである。そして、その論據は羅馬人の都邑及び田野區劃法・周人の都邑及び田野區劃法・阡陌・井田・周代の都邑制と田制との關係・孟子の井地制・徹の意義の諸項の下に詳述されてゐる。やゝ時代を下るに、春秋戰國から漢代に亙る頃、概して支那古代の

物價調節策について（重松俊章、史淵）の研究がある。ここにはゆる物價調節策とは、主として斂散法と平糶法をさす。この中、斂散法は「管子」に初つた。「管子」の著者は既に、需給の關係や、貨幣の數量等が物價の高低を左右するといふ經濟學上の原則を知つて、之等の物價高低の原因を國家の方で人爲的に排除する方法として、この斂散法を説いたのである。尤も、これに類似したただけの方法ならば、それは早く周禮にも見えてゐる。泉府がこれである。従つて、若し周禮が果して周初の制度だとすると、管子の斂散法は周禮の泉府の系統に發源して居るものと見なければならぬ。「管子」以後では、「孟子」にこの方法の實行された證據が見える。第二の平糶法は戰國の魏の李悝が、管子の意圖に法つて創めた一種の物價調節策である。而して漢宣の時に、耿壽昌の獻策によつて建てられた常平倉は、實にこの斂散・平糶の二法の精神を承けて生れたものである。所でこの常平倉の制度であるが、これはいふまでもなく遙か後代までも持續されてゐる。唐を経て宋代に至つては、最も完備の域に達

した宋代の三倉及び其他(曾我部靜雄、東亞經濟研究)の諸倉に關する研究は、義倉、社倉と共に、この常平倉に就いても、先づその起源から説起して宋代に至るまでの間の變遷を述べ、次いで宋代に於ける發達の有様を敘し更に前代のものと比較して、其の特異な點などを説いてゐる。なほ、こゝに其他の諸倉とあるものは、廣惠倉、惠民倉、豐儲倉、及び平糶倉を意味する。これらは何れも宋代にのみ存した救荒倉の一種で、その性質機能は前記の三倉に類似してゐた。概して唐宋の時代には諸般の生活が夫々に活潑を極めた。このこゝは求心的にはその制度の完備を意味するこゝにも、遠心的にはその組織の分化を物語る。經濟生活でも此の例に洩れるものではない。前者の例は已に前掲の論文の中にも示されてゐる。後者に對しては、かの牙人の種類の分化の如きものが其の適例を供するであらう。この牙人に就いての細説は、幸ひ唐宋牙人考(小林高四郎、史學)(同補正)に盡されてゐる。これに據るに、歴史上、媒介業を牙の字を帶びた語で呼ぶのは、正しく唐にはじまるものである。其の名稱の起源に

就いては、稻葉君山氏は、官府を意味する牙に關係ありとされるが、これには從ひ難い。やはり、牙は互の轉化也とする宋人の解に從はねばならぬ。而して其の種類に至つては、茶・鹽・米・織物・莊宅・土地・奴婢・牛馬・蕃貨等の各般に互り、すでに驚くべき多數に上つてゐたのである。なほ以下同考の所説を聽けば、牙税は取引税の一種と解すべきもの、又官私牙の性質は自ら別である。牙行官許の時期については、なほ研究の餘地がある。文獻に現はれる牙人は大抵姦惡の徒輩で、後代明清の頃には彼等に對する取締も嚴重になつたが、其の撲滅は不可能であつた。蓋しこれは、支那特異の商業事情によるものである。牙人の職能は、昔の牙儉よりも廣く、日本の問屋をも兼ね行つた様である。さて、此の項の最後には、明代の稅・役、密寄(下)(清水奉次、東洋學報)に就いての研究も、清代福建江蘇の船行に就いて(加藤繁、史林)のそれとを擧げて置かう。後者は今さら詳説する迄もなく、支那の運送保險に對する考察。そこで只前者の論旨を辿つて見る。明代の役法には均工夫・里甲・均徭・雜

泛なごの名目が數へられる。初め太祖は洪武元年正月に人を遣して浙西の田賦を調べさせた。同年二月に設けられた均工夫は、恐らく此の調査を土台にしたものであらう。均工夫は、特に民田の一頃について、人夫一人を京都に徴して種々の工事に従事せしめるを云ふ。而してこれが設定には、貧民富民に對する課税の不公平の調節の意味が含まれてゐた。下つて洪武十四年には黃冊が造られた。里甲以下の三役は、これに依據して行はれたものである。第一は戸を以つて、第二は丁を以つて計り、第三は不時、上の命を以つて招集された。これらの役法の實施は時の経過にも里長・糧長をはじめ里員一般の疲弊を來した。蓋し納税に關して約束されてゐた連帶責任の重壓が、いつれは彼等をかうさせずには居らなかつたのである。しかしてその影響するところは、或ひは種々の形相をもつ詭寄の案出となり、更らには寄庄地の發展となる。この無際限な奸策。その必然の結果は、當代の土地制度そのもの、崩壞して報いられることとなつた。次に思想史方面のものにしては漢魏の際に於ける時代思

想(橋本循、支那學)に關する考察がある。魏晉の思想界を特徴付けるものは、今更贅言を費すまでもなく彼の清談の流行である。處で、晉書の王衍傳や范曄傳などにはこれを以つて王弼・何晏らの提唱に源流するを見做す議論が見える。併し、この議論は餘りにも眼前の事實に即し過ぎて、却つて時代の思想的傾向は之を等閑に附してゐる。これは、むしろ魏の武帝の政策で、漢末以來の時代思想との結合の中に胚胎されたものと解すべきであらう。即ち、先づ漢末の時代思想——そこには歴世を用晦保身との考へが脈々として流れてゐた。次いで現はれたのは、魏武曹操の狡猾きわまる嚴刑主義で、同じくその道徳性を無視した用人主義である。この結合に於いて人心は空前の懷疑の淵に陥らざるを得なかつた。而して、この懷疑思想こそは自ら老莊無爲のそれに合流せらるべき性質のものであり、従つて、この間に、かの清談も芽ばえたのである——と。そこで急速ながら宗教史方面に眼を轉じる。前年から引續いてゐる唐代に於ける五臺山の佛教(下)(井上以智爲、歴史と地理)の研究は、第一

には、文殊信仰の普及の事實を、動的現象としての五臺山圖の流布、靜的現象としての五臺山佛教關係の山・寺の發生の兩方面から論じ、更らに、五臺山佛教の特徴を擧げてゐる。即ち、先づ、この教派が、大曆以後、一般佛教界の衰運に傾いた時代に、却つて全佛教界の中心をなす程の全盛時代をもつた事を以つて、その第一の特徴とする。第二の特徴は、それが特殊の・詳言すれば、全佛教界に互る超學派的の・山嶽佛教であつた點、第三のそれは、プロツケンProphetの如き氣象上の作用があつて、それが化現化現として文殊信仰の基調背景をなした點であるといふ。次には、同じ唐代に行はれた、漢文の景教經典志景教經典志・安樂經安樂經に就いて(羽田亨、東洋學報)の研究を擧げる。本經典は現存五種の漢文景教經典の一つで、從來未刊のもの、本篇に轉寫されたものは天津李盛鐸氏所藏の原本に据る。全卷一百五十九行、其の内容は、彌師訶彌師訶(メシヤ)が峇穩僧伽シモン・ペテロ || Sord. Sim'on Salga^a)の問ひに對して安樂道を説いた次第を述べたもの、三節八段の構成をなす。その書寫は晚唐期に屬する。然らばその性質は

如何。この點に關して三威蒙度讚の末に附した景教經目の跋を見るに、第一この經は景經僧景淨が或る西土の語で書かれた原典の一つから譯出したものである。且つこの跋が信じ得るものであれば、其の内容は、本來西土のネストリウス教に於いて説かれてゐたものでなければならぬ。果して左様であらうか。これに就いて先づ注意をひかれるのは、この經典の形式が明かに佛典のその模倣に出てることである。併しこのことたるや、當面の問題に對しては、必しも重大な關係を持つものではない。

却つてその内容が、その性質にも拘らず、著しく老子道德經の所説に近いこと、又、その經題が確かに同じく道德經の用語を採用してゐることこそ注意を要するものである。一方、唐代の景教士が、その教義を説くに當つて、これを老子の教へに似通せようとした跡のあることは、かの景教碑の文面によつて明かである。これらの事情を、兩々併せ考へるならば、この經はむしろ、當時の景教士たちが、その教義の宣傳のために、自身唐に於いて選述したものと見るべきであらう。さて、今度は、下つて金代

に於ける道佛二教の特徴(高尾義堅、支那學)を窺はう。概して云へば、この二教或ひはこれに儒教を加へた三教の融合傾向が、この時代の宗教界の特徴をなす。即ち、一方道教の内部からは、進んで佛教の禪定によつて老莊の淵靜を實現しようとする運動が現はれた。他方、佛教に於いても、沙門にして儒佛を兼學するものが出で、又儒家にして佛教を學ぶものも漸次多きを加へて來たのである。では、何故、金代に於いて特に斯様な傾向が著しくなつたか。それは一つには、外部的な遼金諸民族の壓迫のため人心が極度に動搖したこの反動的現象も見られるけれども、要は三教が共に内部的に沈類し、その結果或る一教獨自では充足されなくなつたものを、他教の思想によつて満さんこきを求めるに至つたせいであらう。

以上、列舉して來たもの、外にも、各方面に涉つて多くの貴重な研究が發表されてゐる。文明史方面では、支那に於ける化粧の源流(志田不動曆、史學雜誌)(同補遺)に關するもの、又ゴッロフ氏發見南宋時代版畫美人圖攷(那波利貞、支那學)や支那の繪本(青木正兒、思想特輯支

那號)の話をやうに出版印刷に關するものなきがある。文學史關係では柳翠傳說考(青木正兒、支那學)があつた。これは勿論、かの徐文長の作つた雜劇中の一女主人公に纏る傳説の研究である。學術史方面の勞作に至つては更に數が多い。四岳が舜を堯に薦めた時の語に見える堯典の「象」の解釋につきて(田代通直、東洋學報)の一説、及び洪範に見える筮についての一臆説(津田左右吉、同誌)は何れも尙書の字句に關聯したものであるが、別に影印秘府尊藏宋槧單本尙書正義解題(内藤虎次郎、支那學)には、正義の撰述された次第をはじめ、その内容をの價値等々の各項に互つて、詳細な解説が施されてゐる。その他詩の比興に就いて(橋本循、同誌)の古來の諸學者の説を系統づけ、且つ分類しようとする試み。春秋經成立に就いての一考察(本田成之、同誌)論語原始(武内義雄、同誌)の考究。いづれも尊重に値する。奉天宮殿書庫書目(内藤虎次郎、藝文)は、翔鳳閣後の書庫に在つた八百六十二種の殿板書籍の目録である。翻つて、貿易、交通外交なきの歴史、總じて對外關係史の領域では、さ

んな研究が示されたか。惟ふに、中世支那蕃貨考(續)(日柳彦九郎、東亞經濟研究)や、ロシアの毛皮貿易及びその支那日本との關係(矢野仁一、同誌)及び、西曆十七世紀間、イスパニア及びオランダの支那貿易に就いて(同人、同誌)の研究、さては、イギリスの支那派遣使節アマーストの使命失敗に就いて(同人、史林)の考察、又支那排外運動の一考察(小林幾次郎、東亞經濟研究)なきがその大勢を代表するものであらう。次に歴史地理的研究では、江准運河小記(岡崎文夫、支那學)は史記河渠書に禹の治水を述べた條に「自是之後、蔡陽下引河、東南爲鴻溝、以通宋鄭陳蔡曹衛」、……于楚……東方則通鴻溝江淮之間……の句があり、漢書溝洫志には於楚……東方則通溝江淮之間に作るが、鴻については或は之を衍字とする説もあり、又鴻溝を以て「大きな運河」を意味する普通名詞と見る説もあるが、共に賛成し難く、鴻は衍字ではなく其元の意味はこもかく前記のものは既に普通名詞ではない。此は漢楚の劃界となつた鴻溝或は洪溝に當り、其所在については酈道元の説に従つて浚儀即ち今の開封

府から南流して安徽省懷遠縣で淮水に注ぐ沙水の事とすべく、結局溝洫志の文は蔡陽、開封、壽春の西と云ふ風に連絡する大運河の存在を示すもので、此は既に戰國時代には完成して居たものと云ひ、兀良哈三衛の本據について(和田清、史學雜誌)は三衛を總稱して兀良哈と云ふのは明人の誤用で眞の兀良哈は朶顔の一衛に限り、其衛名は土地の名山大朶顔山より出で *Novan* と讀まず *Doyan* と呼ぶべく、其後身が今の喀喇沁部である。又秦寧衛の名は元代の秦寧路、溯つては遼金以來の秦州から起り、其地は今の洮南附近で明初に三衛の首衛が置かれた。福餘衛も其名は古の扶餘と無關係で却て金代の蒲與路と聯絡があり、本據は今の齊々哈爾方面らしく其東方の瑚裕爾河より其名を得たもので、後の科爾沁部は必ず之關係があらうとの考である。人物評傳記及年譜の方面を見れば、諸子の中老子は時代後れの道徳を説き其時を得るべきを問はず自ら才を恃んで強ひて所信を貫かんとする欲望満々たる一小人と云ひ、莊子も孔子の徒を非難したが、先秦に於ける道墨法雜諸家の孔子觀(平野彦次郎、斯

文)は、多くは列子に見るが如く高德にして達識な聖人としたらしい。又史記漢書の根本史料を始め下つては清の吳榮光の名人年譜、民國張惟駿の疑年錄彙編等にも缺けて居る司馬遷の生年に關する。新説(桑原隲藏、史學研究)が提供されたが、此説は著者が民國王國維撰「太史公繫年考略」の景帝中元五年(西紀前一四五)説、同じく張惟駿撰「太史公疑年考」の武帝元光六年(同一二一九)説の根據を對比検討し其孰れにも弱點を認めて考察を下した第三説である。由來此問題に關する史料は史記正義(博物誌に據る)史記索隱の二種に限られ、説の分るゝのは只此等史料の解釋如何にか、つて居たが、著者は博物志に見えた司馬遷に關する記事を其内容形式の二方面から信憑するに足るゝした點は王氏と同様であるが、本文の數字に改竄を加へずに元封三年(西紀前一〇八)を遷が二十八歳の時と認め、従つて其生年を建元六年(同一二三五)と見て居る。屈原の研究(茶谷忠治、斯文)は顧炎武既に其傳を疑ひ、近くは胡適も漢代人が一種の儒教の見解から捏造した傳説の人物と見るに對して、彼の傳記を精査し、

其當時の書に名の見えぬのは南方の田舎漢であつた爲であるとし、其作品中には自作でないものもある事を指摘して居る。支那に於ける密教極盛期の最後を飾る惠果和尚に就て(村上長義、東洋學報)は、記錄の少い中から主として空海の錄する所に據り誕生より入寂迄即ち家系、師事、受法、著作、祈禱、靈驗、授法、付法を述べ空海との關係に及び、戲曲「桃花扇傳奇」の作者で康熙二十五年から二十八年迄滿三年揚州に在りし日の孔尚任(青木正見、支那學)は、其歴遊の趾を辿り交遊關係を見たとのである。又影印祕府尊藏宋槧單本尚書正義解題(支那學、内藤虎次郎)中に含まれた孔冲遠蔡酒年譜は、兩唐書・唐會要・冊府元龜・昭陵陪葬碑等によつて正義の撰者孔穎達の事歴を明にし明代の文學者李夢陽年譜略(鈴木虎雄、藝文)は、氏が將來發展されようとする「李空同年譜」の概要で、本文にはなほ彼と王陽明との交渉、及び彼の詩文全集である空同集の諸種の版本の系統にも論文として居る。以上をもつて支那史の部を了る。

最後に、支那の外史及び諸異族に關する論文名を挙げ

ておく。先づ、周邊史にあつては、琉球について隋書流
求國傳の再吟味(秋山謙藏、歴史地理)、この再吟味の結
果をほゞ妥當であるを認める隨書の流求傳に就いて(喜
田貞吉、同誌)の見解、それに、琉球征討以後に於ける
島津氏の植民政策の發展(秋山謙藏、史學)を跡づけた論
文なきがあつた。臺灣に關しても、臺灣の名稱に就いて
(坪井九馬三、歴史地理)、同じく臺灣にいふ名稱の起原
及び意義(史學研究、幣原坦)に就いての解釋や、高砂國
の考察(同人、史學雜誌)がある。それ以外の處では、我が
寛永十七年に建てられ、その助供者の中に多數の邦人の
名の誌されてゐる安南普陀山靈中佛の碑について(黒板
勝美、史學雜誌)の紹介や、唐と西藏との關係を知る上に
極めて重要な史料である唐蕃會盟碑文(寺本婉雅、大谷學
報)の譯出なきを注意すべきであらう。西域史に關する
ものは割合ひに少なかつた。しかし、敦煌雜考(石濱純
太郎、支那學)や讀碑札記の中より(内藤虎次郎、同誌)
に見える吐魯番出土の古碑の讀解(こも)にも、西突厥王庭
考(松田壽男、史學雜誌)の勞著を得た(こも)は、誠に喜し

い次第である。これは、かのDizabouios可汗の王庭とし
て知られ、又その子の「Tartouも據つてゐたEctas(=阿
羯田山即ち白山)を、今の裕勒都斯の大豁谷に近い額什
克巴什山に比定するものである。最後に印度史に一つ。
佛陀伽耶大塔非塔婆論(足立康、同誌)が出て、形式上及
び文獻上から、いはゆる根本大塔は精舎の一種を見做す
べきものとした。〔今石・安部〕

西洋史 まづ單行書として刊行された諸書を一覽す
るに經濟學專攻の人々により經濟史の研究が諸種公けに
されたのが注目される。既に「近世商業史」の著を有する
野村兼太郎氏は新たに「世界商業史」の名の下に古代社會
に於ける商業を核心とせる經濟史を著した。羅馬帝政時
代迄を含んで居るこの書は寧ろ古代商業史とも云ふべく
やがて中世、近世の商業史を得て完きものとなるであら
う。「ヨーロッパ經濟史」(德増榮太郎)は時代からして前
者に續くべきもので中世歐洲を取扱つて居る。基督教の
發展から、修道院の情況、封建社會の組織等を詳説する
あたり經濟史と云ふよりも文化史と名づくる方が妥當な

るべく、我國ではこもすれば疎かにされる西洋中世史の研究には興味深きもので新陸地發見時代迄を含めて居る又改造社出版の經濟學全集の中に「唯物史觀經濟史」「各國經濟史」の二卷を見る。共に短時日の間に成されたもので簡約概念的なものにすぎないが石濱、河野、野村、丸岡、平、嘉治等の小壯經濟學者の手により、前書では古代原始社會から現代の社會主義經濟の發展時代に至るまでの、後書では英、佛、獨、露、米の各國の經濟史が各々まごめられて居る。經濟史が各時に互つたのに比して政治史方面は殆んど最近世に限られた觀がある。「最近政治外交史」(坪井九馬三)は前年發行された同名の著三卷に連續すべきもの「世界大戰前の列強の政治外交」の編を含む千頁に近い大冊で、十九世紀末から今世紀にかけての世界の大勢を詳説し、支那、土耳其の二老大國、或はアフリカ等に對する英、露、獨、佛の野心策動が如實に展開されて居り、就中極東方面に於ける新興日本を中心とした列強の帝國主義の活躍が興味深い。「近世々界政治外交史論」(吉村勝治)はフランス革命よりロカルノ會

議に至るまでを題註した如くこの間約一世紀の政治的世
界史を叙述したものである。歐洲を中心とし一部分アメ
リカにも觸れて居るが極東方面の動きが閑却されて居る
のは残念であるが四百餘頁の書にこの變化多き一世紀を
盛る事は極めて至難なるにも係らず、要領よく統一要約
されて居るのは敬服する。又一九一七年十一月の革命以
後一九二七年、對英斷交に至るまで勞農ロシアが辿り來
つた對外的難局の經過を述べた、エム・タニンの「ソヴイ
エツト外交十年史」(廣岡、大竹譯)の譯書も出た。尙ソ
グライエツト・ロシアに關しては、ロシア大革命を裏面史譯
編輯(ロシア問題研究所)なる叢書が刊行されロマノフ
朝末期及び革命時代のロシアにつきて、主として支配者
階級より見たる文獻——日記書翰追想記——の翻譯を出
した。クルコフ將軍の「帝政ロシア没落の眞因」や國會議
員シユリギンの手記等を含んで居る。同輯中の一冊「露
帝シ獨帝の往復書翰」は特に興味深く讀まれた。

一般史的のものには「西洋大歴史」(淺野利三郎)がある
最初に史學概説を載せ、古代より中世末迄を含み相當細

論に互つて居るから教授及び受験参考用として好適なものである。又「歴史辭典」(思想エンサイクロペヂヤ)も至便なる参考書と云ひ得る。

廉價版の流行が遂に史學方面に迄及んで春秋社が史學關係の名著を集めて翻譯刊行した。既にギボンの「羅馬衰亡史」(野々村戒三譯)、カーライルの「フランス革命史」(柳田泉譯)、ウエルズの「世界文化史」(北川三郎譯)、ブランデスの「十九世紀文學思潮史」(吹田順助譯)、ベエアの「英國社會主義史」(加田哲二譯)、等を出し、尙次いでブルクハルトの「文藝復興史」(山岸光宣譯)、ゾムバルトの「資本主義史」(田邊宗男譯)等をも刊行する豫定である。かゝる史學の古典的名著が邦譯されて廉價に人々に得られる様になつたのは喜ぶべきである。その他法制方面では「米國憲法史」(倉持千代)、「西洋立法史」(栗生武夫)、等があつた。又コリニヨンの「バルテノン」(富永惣一譯)、も多くの圖版を入れて邦譯され、又前年出版されたベトリイ教授の「埃及美術史」(石山敏郎譯)も改装再刊された。(以上猪谷)

次に雜誌論文の方面を見るに、矢張り例年に變りない模様である。主な論文を舉げて見るに先づ古代では「羅馬帝政時代に於ける政治的及び經濟的傾向」(林武雄、史學雜誌)がある。古代世界の没落即ち羅馬帝國衰亡の原因に關する考察であつて、ラティフンディアの結果羅馬の農業が衰へたのみならず、商工業方面に於ても伊太利半島は東方並びに西方に對して漸次劣敗者の地位に墮ち對策として用ひられた職業上の強制法が却つて國民生活を弛廢せしむるに至り、結局超中央集權的政策が羅馬衰亡の素因をなしたと述べてゐる。中世に關するものは「カール大帝時代の文化とその特徴」(菅原憲、大谷學報)がある。中世史に現れるゲルマン中、最初の歴史的な人格たるカール大帝は又中世史の序曲と本曲との境界を劃するものといへる。何ぞなれば中世の特徴即ち帝國思想の實現、國家と教會との交渉等は、大帝の時代に始めて現はれて來るからである。要は羅馬文化とゲルマン文化との調和に在る。この調和、融合をして發展が如何なる程度まで進んだかに關する略述である。近世初期に

關するものでは「マキアベリの君主論に就いて」(大類仲史學雜誌)が注目すべきである。君主論の序文及び第二十六章は他の諸章と異つて特にロレンツォ・デ・メディチに對して書かれてゐる。そは如何なる理由によるか。それも、英佛等に於て國民的國家の傾向著しい當時に、君主論が書かれたのは、伊太利當時の狀勢の要求に從つたに他ならぬ。そして序文及第二十六章が特にロレンツォに對して書かれたのも一説の如くマキアベリの就職上の欲望に原因するといはんよりは、矢張り時代の要求の表現を見るが適當である。殊に彼がダントテよりもベトラルカに近づき、人間の力を強調讚美してゐるのは正に古代羅馬精神の復活であり文藝復興の完き姿と見られるといふ論旨である。「免罪符の財政的意義」(高里良恭、同誌)はルーテルの九十五箇條が意識的に免罪符そのものを攻撃せず、單に實際上の弊害を攻撃してゐるのに、何故それが宗教改革てふ如き大事件を惹起するに至つたか、これには神學的理由以上に政治的經濟的理由が重大であらうと、免罪符販賣の沿革から説き起して、その獨逸諸侯

の政治的、經濟的關係を論じてゐる。下つて十八世紀に入るに「メンデルスゾーンとその改革事業」(菅原憲、史林)がある。レッツシングの「賢者ナタン」のモデルといはれるメンデルスゾーンが、如何にして猶太人境遇改善に盡力するに至つたか。彼によつてプロシアの猶太人の境遇が如何に改善せられ、又各地の啓蒙運動に如何なる刺戟を與へたかを述べてゐる。猶太人問題に關しては、なほ其他に、「反猶太主義の發展」(猶太國民主義及びその端緒に就いて)(共に長壽吉、歴史と地理)が發表されてゐる。前者に於ては、反猶太思想の起原は頗る古いが反猶太主義てふものが明確な社會現象として現るゝに至つたのは近代殊に最近世の事である。殊に理論的基礎をおき、政治的經濟的目的を明示するに至つたのは獨逸を以て始めとするにて、反猶太主義の獨逸に於ける發展を略記し、並びに大陸他國に就いても略述してゐる。後者に於ては、近代猶太族の思想的解放と、之に基づく猶太國民主義或は廣義に猶太主義の思想の發展を、就中十九世紀前半に就いて詳述し、併せて根據たる思想一般に及

んでゐる。「舊教復興と自由主義」教會分離の由來」(長壽吉、史學雜誌)は共に國家教會の分離問題を取扱つてゐるが、前者に於ては、ザイベル氏の「二つの佛蘭西」なる著書に筆を起し、佛蘭西に於て、宗教的舊教的思潮と非宗教的反教會的思潮との二潮流の對立あるこゝを述べ一八三〇年以後の舊教復興、一八七〇年以後の國家教會の分離、並びに一九〇五年頃よりのシヨン運動等に就いて詳述してゐる。そして國家主權の信仰、民主權の信仰及び法皇主權の信仰等の思想が、佛蘭西に於て極めて純粹な形に於て表現されつゝ、文化發展に反映してゐることを説いてゐる。「汎回教運動の發展」(内藤智秀、同誌)は十九世紀以前に於ける汎回教思想の沿革を述べ、近代汎回教思想の發生並びに同運動の概況に及び、結局回教が時代に應じ、國民性と調和して發達し行かんことをすれば、回教諸國を政治的經濟的に統一する如き汎回教運動は實現困難なりと論じてゐる。尙詳細なる註を附してゐる。最近。世に於て近年活況を呈してゐるのは大戦後公表された各國文書による大戦前外交關係の研究である。「一八六六

年六月十二日埃佛伊密約に關する一考察」(時野谷常三郎、史林)一八六九年に於ける佛埃伊三國同盟の研究」(大村作次郎、史林)「ナポレオン三世の外交政策」(同氏、歴史と地理)の三篇は何れも最近公開された埃國々立文書館の文書を材料として發表された新研究である。最初の篇は前述の文書館に藏せらるゝ同密約の原本が、ボイストによつて、「最も信すべからざる公文書」として否定されたに對する駁論である。主として當時サクソニアの駐英員外公使であつたヴィツ、ム伯の備忘録によつて史學的考證を行ひ、該條約の存在を肯定してゐる。大村氏の最初の篇はこの同盟が從來漠然と推定さるゝに過ぎなかつたのが、大戦後大いに明かになつたこと、ステルンの「歐洲史」第十卷及びオンケンをも参照して研究し、これにより從來のビスマルクの對佛挑發外交に於ける傳統的判斷は大いに訂正の要ありとする。最後の篇は前者の反面を爲すべきものであつて、獨佛戰役に於けるナポレオンの失敗の原因を研究したものである。「第二次日本イギリス同盟成立の顛末」(坪井九馬三、史學雜誌)は、日本史に

も關係のある問題であるが最近英國外務省で發表した同問題關係文書によつて此問題が始めて分明になつたことその成立の概要を紹介したものである。「原」

考 古 學 界

昭和四年度に於ける吾が考古學界の業績を顧るに當り一層感慨の深いものがある。明治十一年にエドワード・エス・モース氏によつて始めて吾が先史考古學の基調をなさしめた大森貝塚に其記念碑の建設を見たること、他方、吾が東亞考古學會が南滿洲碧流河畔の先史時代遺跡として「魏子窩」の業績を公にされたこと、對照して、此の約五十年間に於ける吾が先史考古學の躍進を如實にツレースし、兩者の劃期的業績の印象を更に大にするもの云へる。輓近の吾が考古學界の趨勢は獨り先史時代のそれのみでなく各時代に亘り、同様の業績が日、支、鮮の全般に及んで着々として基礎づけられてゐることは事新しく述べるまでもない。以下簡単に遺物遺跡を對象とする考古學の既往一年間に於ける主要な論述を擧げて見よう。

日本の石器時代に於いて綜合的見解とするものに先づ「日本文明の黎明」(濱田耕作、史學雜誌)を擧げねばならぬ。即ち舊石器時代の存否に關して其の存在を可能とし、新石器時代の二つのフェーズとする繩紋と彌生式土器の發生を推究して、前者は北方アジアに連絡する假定説を提供されたことは繩紋土器發生の見解に一新面を開くもの云へる。後者は朝鮮より入り、金石並用時代を齎らしめたるものであり、此兩者は文化的乃至民族的の聯絡を有し、それが原史時代に及べるものであることが強調されてゐる。又た「日本の古代土器」(同人、史前學雜誌)も繩紋土器の起源問題を論及するものであつて、前者を更に具體的に説述するものである。「我國石器時代研究の現況」(大山柏、同誌)は既往五十年間の發達を序し現代の情勢を記せるもの、「日本石器時代提要」(中谷治宇二郎著)は當代を對象として其の研究の範圍方法を擧げ當代研究の一基準を作つてゐる。次に個々の遺跡遺物を擧げるものを今ま北部から見るに「千島及び辨天島出土土器破片」(平光吾一、人類學雜誌)「小樽西部の遺

物遺跡」(室谷精四郎、東北文化研究)あり、「北海道手宮洞窟内の彫刻に就いて」(喜田貞吉、同誌)は小樽附近に存在する所謂突厥文字として世に喧傳さるゝものなるが其の文字ならざるのみでなく、近世の僞作にかゝるものである證左を擧げてゐる。「青森縣是川村石器時代の一大新發見」(同人、同誌)は龜ヶ岡式繩紋土器と共存して、漆器木製品木弓等を發見し、此等の木製品の或者は鎌倉時代を遡るものでないことされ繩紋土器年代考察に寄與するものゝ大なることは云ふをまたない。「陸前國名取郡増田町十三塚の石器時代及直後遺蹟」(松平彦七郎、人類學雜誌)は該土器を石器時代の末期に屬するを述べ「關東北に於ける織維土器」(山内清男、史前學雜誌)は繩紋土器の或種のものゝ組成には其中心帶をなすものは長き織維質のものを以てし其表裏に化粧粘土を附して焼成したるものであることし、附するに織維土器なる名稱を以てするものである。而して氏はこの土器を以て織維を含まざるものよりもより古式とし、圓筒形及び深き鉢形のものに多くを占めてゐることされてゐる。「茨城縣小文間村中妻貝

塚調査概報」(甲野勇、同誌)は當代遺蹟の文化相を示すものとして、曩に氏の調査に關る埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚の出土遺物と比し比較的單調なりとし、此種遺跡の着實なる例證を示されてゐる。「山梨縣穴山村石器時代遺蹟」(船窪久、史蹟名勝天然記念物)「甲斐淺尾原石器時代遺蹟」(同人、同誌)「名勝猿橋を繞れる石器時代の遺跡」(仁科義男、同誌)あり、「甲斐國北都留郡上野原遺蹟について」(同人、人類學雜誌)は從來閑却せられし同地方の遺跡を調査したるもの「諏訪郡長池村字中村發見土製猪」(兩角守一、史前學雜誌)は從來出土例の少いものを擧げてゐる。「下總上本郷貝塚の堅穴に就いて」(伊東信雄、同誌)「武藏高麗村に於て發見せる石器時代住居址」(稻村坦元、史蹟名勝天然記念物)は共に住居址を調査するもの、此種の研究が千葉縣東葛飾郡の姥山貝塚に其の規矩的好例を發見してより各地に續々同様なる遺址を發見するに至つたものであつて、後者は埼玉縣入間郡に存在し、長徑三十尺餘をなす瓢形にして各中心に一個宛の石爐を有し、各種の石器土器を共存することをも明にして

る。「千葉縣良文村貝塚概報」(大山柏、杉山壽榮男、宮坂光一、甲野勇、史前學雜誌)は利根川沿岸の小見川町に近く著名なる阿玉臺貝塚に近接する七個所の集群するもの、一つを組織的に發掘したるものであつて、主鹹貝塚にして、東京灣方面に於ける絶滅種の貝塚を發見せず又た土器の紋様多く沈紋にして特に香爐形顔面附土器を出土してゐるが從來見る關東の諸貝塚のものご特異なるものを見ないこされてゐる。かくして曩に擧げたる眞福寺、小文間貝塚等の組織的調査に基く繩紋土器年代學的考究の一基礎を作つてゐる。「敷石遺跡の新資料」(八幡一郎、人類學雜誌)は相模國津久郡川尻村發見のものであつて、堅穴遺跡に次いで生ぜしものであらうこされてゐる。「遠江國小笠郡に於ける石棒の分布」(西郷藤八、考古學雜誌)「神奈川縣田浦町複合遺跡」(赤星直忠、同誌)「三河菟足貝塚」(古谷清、史蹟名勝天然記念物)等注意すべく「御物大石器」(飛驒の異形石器)(犬塚行藏、考古學雜誌)「飛驒國廣瀬の沖積層地に於ける石器時代遺蹟に就て」(岡村利平、史蹟名勝天然記念物)の后者は地下十尺

の處から出土せる異例を擧げ、尙ほ同地吉川町大日から圭形の有孔玉器を出土してゐるこが注意を惹く。「大和下田村出土の繩紋土器に就て」(吉田宇太郎、考古學雜誌)は該系統土器の僅少である近畿に於いて完形品を出土せるものである。「藤原貞幹舊藏の土器」(直良信夫、人類學雜誌)は好古日録所載の岡崎村云々こする近畿繩紋土器として著名なるものであるが、從來把手の一部分なりこありしものを容器の一片ならんこする。「兵庫縣下に於ける二つの石器時代爐に就て」(同人、同誌)に但馬國城崎郡新田村と明石郡押部谷村細田平町の二例を提示してゐる。「防長石器時代資料」(弘津史文著)「臺灣石器時代遺物發見地名表」(史前學雜誌)は夫れ々、其の所出を明にせるものである。

以上は石器時代の繩紋系に屬するもの、大要を擧げたるものであるが、何れも關東以東からその豊富なる資料を提供してゐる、近時此等の遺跡相互の性質が個々の組織的調査の爲に頗る究明せられて來たこを見逃すここが出来ない。斯くして此等の遺跡を構成する年代的考

察が漸次基礎づけられて行くことを祝福せざるを得ない。他方、石器時代人々骨の人類學的測定は益々其の發表の多きに接してゐる。肥後國下益城郡阿高村西阿高村貝塚人々骨の人類學的研究〔岡本辰之輔、人類學雜誌〕吉胡貝塚人々骨の人類學的研究〔田幡丈夫、同誌〕吉胡貝塚人變形頭蓋〔金關丈夫、金高勘次、同誌〕沖繩縣那霸市外城嶽貝塚より發見せる人類大腿骨〔金關丈夫、同誌〕「日本石器時代の齧齒〔清野謙次、金高勘次、史前學雜誌〕動物には「石器時代家犬〔長谷部言人、人類學雜誌〕等あり、此等の人骨測定により導き出されたる人種論として「四肢骨の研究に基づける日本石器時代人種類」〔清野謙次、平井隆、關政則、同誌〕「日本石器時代人種論」〔清野謙次、金高勘次、考古學雜誌〕あり、後者は當代人骨三百餘例を出せる吉胡貝塚の測定により導きたるもので、吉胡貝塚人は津雲貝塚人よりも現代日本人に近い體質を有し、吉胡貝塚築成は津雲貝塚に比し後期なりとされてゐる。顧みるに大正の半中期に出現した幾多の當代人骨は今や著々整理測定せられて華々しかつた當代遺跡調査の

跡を結びつゝ、人類學的調査による人種論の劃期的基底を積み上げてゐる。大森貝塚記念碑は大山柏山山彦一氏等により其の建設を見るに共明治十七年創立された東京人類學會の機關雜誌は五百號を記念するあり、他方、大山柏氏は史前學會を創立して特に先史時代の分野に躍進しつゝ、あることを附記して繩紋系先史時代の概要を打切ることをする。

次に彌生式系の先史及び金石並用期時代の遺跡遺物を主題とするものに「東京府久ヶ原に於ける彌生式の遺蹟遺物並にその文化階梯に關する考察」〔中根君郎、徳富武雄、考古學雜誌〕「攝津國高槻攝津農場石器時代遺跡調査報告」〔島田貞彦、小野清一、小川五郎、三宅宗悅、人類學雜誌〕の後者は淀川沖積の低平なる遺跡をなし、豊富なる土器と共に扶入鑿形石斧、石庖丁、石劍等を出し、近畿に於ける他の著名なる遺跡が何れも金石並用期或は以降の遺物を出せるに比し、石器の並用から歸結して一つの年代的考察を導かんとしてゐる。(丹後函石濱遺跡の「查報」〔松木勇、直良信夫、考古學雜誌〕「鳥取沿岸に連展

せる海濱砂丘地帶遺跡の史的考察〔直良信夫、歴史地理〕は何れも砂丘遺跡として特殊なるもの。「安藝福田遺跡調査豫報」〔森本六爾、人類學雜誌〕は大石下に銅鐸、細形銅劍クリス形銅劍の共存する遺跡として著名なるものであるが、此等の大石は人工的作爲のものとするも、組合式石棺の種類ではないと推察してゐる。「因幡長者ヶ庭摺鉢附近に於ける銅鐵器出土の遺跡」〔直良信夫、歴史地理〕は共存する彌生式土器を明にしてゐる。「二三の彌生式土器紋様」〔同人、考古學雜誌〕「彌生式土器面繪畫の新資料」〔森本六爾、歴史と地理〕「底部に一孔を有する彌生式土器」〔樋口清之、史前學雜誌〕「彌生式注口形土器」〔同人、同誌〕「磨製石鏃の材料を容れたる彌生式土器」〔長山源雄、人類學雜誌〕等が注意を惹く。銅鐸に關するものに「播磨國明石郡垂水村發見銅鐸」〔島田貞彦、考古學雜誌〕「垂水村新發見の銅鐸とその出土状態」〔直良信夫、同誌〕は同一個所出土のものに就いて述べ、「播磨神種發見の銅鐸」〔太田陸郎、考古學研究〕「伯耆米里發見の銅鐸とその出土状態」〔同人、考古學雜誌〕の外、「尾張高藏寺村附近發

見の遺跡遺物」〔小栗鐵次郎、同誌〕には神領出土の銅鐸の遺存を明にしてゐる。「尾張馬見塚甕棺の真相」〔森徳一郎、考古學研究〕「周防に於ける青銅器彌生式土器伴出の遺蹟」〔柴田常恵、同誌〕は共に興味ある資料である。「有銘の銅鐸」〔中山平次郎、歴史と地理〕「九州の二銅鐸」〔同人、三宅博士古稀祝賀記念論文集〕は共に同一銅鐸に觸れたるもので、鐸の内側に陽刻を以て子々孫々□□あり、一時學界の視聽をそばたしめたが遂に僞作なることが明にせらるゝに至つた。「須玖岡本新發見の硝子製勾玉」〔同人、歴史と地理〕は金石並用時代の遺跡として最も著名なる大石下出土遺物の局地から發見せる長さ二寸七分強三條の丁字頭を有する勾玉であつて、氏はこれを以つて本邦人の爲に支那にて製作せるか、或は支那の材料によりて本邦にて加工したるものならんことを興味ある研究題目たるを失はぬものである。「須玖岡本の鏡片研究」〔同人、考古學雜誌〕に於いて遂に三十三面上を可能とし、「銅銚鎗范の新資料」〔同人、史前學雜誌〕は筑前國筑紫郡日佐村大字五十川出土なるを報じ「信濃

若宮銅劍」(中山省三郎、坂口保次、森本六爾、考古學研究)に其の出土状態を推し、「銅劍及前漢式鏡の資料増補」(同人、歴史と地理)は甕棺内共存遺物の文獻を紹介するものであつて、筑前國筑紫郡二日市町峯に於いて安政年間に細形銅劍一口と内行花文星雲鏡一面との伴存ありしものである。「壹岐國加良香美山貝塚發掘の鏡に就て」(同人、考古學雜誌)は出土の鏡鑑を以て仿製鏡を推し、彌生式遺跡として須玖發見の一例と共に注意すべき物遺なるを明にしてゐる。「銅劍に就いて」(同人、同誌)其の出現期を考察して金石並用時代と重なりて金石並用の古墳時代即ち古墳時代前期の存在を強調し、銅劍銅銚は金石並用時代に銅劍は古墳時代前期の所産なりとし、前者は其の原料を支那に仰ぎ、後者は日本にて採銅して製作したものであらうとする。「銅劍の形式」(後藤守一、三守博士古稀祝賀記念論文集)に於いて氏の滯歐中の所見にかゝる銅劍を挙げ特に最も廣く分布してゐる三刃式劍に就いて記する處がある。

以上は昨年度に調査報告せられた當代前後に關するも

の、大要に過ぎないが、本邦の金石並用時代究明は吾が考古學上に於いて最も意義ある時期を形成するものであり、彌生式土器、甕棺、箱式棺、銅劍銅鐸、石劍等何れもこの文化系統に屬してゐる。而して將來益々此方面に關心せらるゝものであるに違ひない。「日本青銅器時代地名表」(森本六爾編)は前年度に出刊せられた「日本石器時代地名表」(東京帝國大學人類學教室編)と共に時期に適應する編纂を云へる。當代に關する遺跡調査として「須玖岡本遺跡發掘」(京都帝國大學考古學教室、史林)は甕棺十一個と内に細形銅劍一口の伴存を立證したるものであつて、昨年度に於ける注目すべき調査發掘である。

次に原史時代を觀るに古墳と其副葬遺物を題材とする今ま北からするに「川柳村將軍塚の研究」(森本六爾著)は信濃國川柳村石川に存する一前方後圓墳であつて竪穴式石室をなし、遺物は往古に於いて盜掘せられてゐるが、仿製を含む鏡鑑、銅劍、筒形銅器、車輪石等の特殊なものを明にし、本墳の構築を以て畿内文化圏の東漸と地方的色彩を有する六朝中期以後の古墳としてゐる。「上代に於

ける鎌(兩角守一、人類學雜誌)には信濃出土古墳のものに就て記し、「上野國箕輪町上芝古墳」(柴田常惠、同誌)は帆立貝式古墳を命名する特殊の形式をなし、埴輪圓筒を圍繞し、其の前面に埴輪土偶の存在を明にするものである。「八幡塚古墳」埴輪概況」(福島武雄、上毛及上毛人)、「保渡田八幡塚外圍發掘概況」(岩澤正作、吉澤澄治、同誌)は共に上野國群馬郡保渡田に有する一前方後圓墳の外圍に重刻をなし圍繞する埴輪圓筒とその重刻の前方部の一局所を劃して存在する埴輪樹物の群在に就いて記せるものであつて、此種の如く埴輪樹物の存在を明瞭ならしめたことは今回を以て嚆矢とすべく、實に昨年度に於ける考古學上の一大業績と云へる。埴輪土物の配置に就いて(島田貞彦、史林)は上記の二例並びに下野足利郡葉鹿町熊野に遺存する横口式石室を推定する圓墳の正面に圍繞する埴輪樹物の三墳によつて、埴輪樹物の起原の考察を試み石人的表飾よりもむしろ明器的土偶としての表飾の多きことを強調するものである。「下總國外部田の横穴に就いて」(内藤政光、考古學雜誌)「相模佐

島横穴」(赤星直忠、同誌)「遠江國御厨村堂山古墳調査報告」(西郷藤八、同誌)「尾張高藏寺附近發見の遺物遺跡」(小栗鐵次郎、同誌)「名古屋市内に於ける軌近發掘の二圓墳」(同人、同誌)等あり、最後のものは田代町城山及び井戸田西塚の兩墳を舉げ、前者は阿波式石棺にして粘土槨をなし、六朝式鏡鑑、鈴劍、三鈴等の遺物を包藏するもの「美濃國海津郡城山村城山古墳」(林魁一、同誌)「岐阜縣不破郡青墓村大字矢道長塚古墳」(藤井治左衛門同誌)の後者は注目すべきものであつて、前方後圓墳にして木棺を遺存し、三角縁神獸鏡、玉類、銅鏃の外に鐵形石、劍、杵形等の石製模造品を副葬するものであつて而かも埋葬状態を明にしてゐることに於いて近時稀に見る遺物と云へる。「河内國玉手山西山古墳調査報告」(水野清一、小川五郎、同誌)は阿波式石棺に類するものから神獸鏡を出せるもの「攝津の鈴鏡出土の古墳」(木村次雄、同誌)にて川邊郡川西町寶塚山の横口式石室を有する前方後圓墳より六鈴鏡出土の新例を報じてゐる。(再び甕形土器に就いて(島田貞彦、歴史と地理)にて大和國、

南葛城郡忍海村古墳出土の一例を擧げるもの、「古代吉備に於ける古墳の型式と其殘存」(西村真次、人類學雜誌)「豊前國築上郡黒土村の地下式横穴」(吉村鐵臣、考古學雜誌)「豊前國唐原村下唐原發見の裝飾古墳に就いて」(同人、史蹟名勝天然記念物)の最後のものは横口式石室の羨道部の一側面に陰刻されたる動植物形の如きものを指せるものであるが、昨年同じく報道せられた河内國中河内郡堅下村修徳館構内の横口式石室に陰刻せる繪畫的のものと共に多大の疑問を存在するものであらう。「日拜塚」(島田寅次郎、筑紫史壇)は筑前國筑紫郡春日村にある横口式石室を有する前方後圓墳にして、黄金製耳飾を發見せるもの、「日本古墳出土の板ガラス片に就いて」(原田淑人、人類學雜誌)は福岡縣八幡市箱崎福田澤古墳出土と稱するもので其比重四、八二を算し、普通の硝子の二・六に比し頗る大なるものである。これに類する肥後出土の玻璃製勾玉の同じく比重の大なるものと對比して魏書西域傳の北魏世祖の行殿の記事を参照して勾玉の原料として支那より輸入を見たものでなからうかこしてゐる。「日向

國王之山所掘の璧(直良信夫、考古學雜誌)は世界美術全集に圖示されたものに基いてゐるが、三雲須玖出土のものと共に注意すべき遺物である。「衝角附冑の頂邊の附物及鍔形に就いて」(末永雅雄、同誌)「巴形銅器考」(森本六爾、三宅博士古稀祝賀記念論文集)の後者は十三所五十二例を基本として二種三類に分ち第一類(截頭圓錐狀七脚式)第二類(圓錐狀四脚式)第三類(圓板狀座四脚式)として第一類は金石並用期に第二、第三は古墳時代に屬するものとされてゐる。「石人石馬」(森本六爾、日本考古圖錄大成)「鏡鑑」(大場盤雄、同上)の圖錄を主體とする編著がある。尙ほ「前方後圓墳の出現」(和田軍一、歴史地理)「前方後圓墳より方墳へ」(同人、同誌)等は陵墳築成に關するものであり、尙ほ將來に残されてゐる主要問題である。

當代に屬する古墳人骨の測定は先史時代のそれと共に吾が人種論の基礎を作るものであつて、「備前國赤磐郡輕部村大字西輕部古墳より發掘せる人骨」(平井隆、人類學雜誌)「伯耆國東伯郡灘手村寺田字長谷古墳人骨」(金高勘次同誌)「伯耆國東伯郡東郷村別所寺山古墳人骨の人類學

的研究〔同人、同誌〕「伯耆國東伯郡宇野村古墳人骨」〔同人史前學雜誌〕「丹波國與謝郡加悅町大師山古墳人骨」〔同人歴史と地理〕「神戸市板宿得能山古墳人骨」〔同人、同誌〕等が昨年度に於て人類學的調査のみに遂行されてゐる。如上の遺跡遺物を主材とする題目を顧みるに漸進的の進展を告げて居り、石製模造器具、巴形銅器等特殊な興味を惹くもの、外、最も特記すべきものは兩毛地方所在の古墳から埴輪圓筒及樹物の配列を明示するものがあつたことである。

歴史時代に入り、先づ宮寺趾に「大津京趾の研究」〔肥後和男、滋賀縣史蹟調査報告第二冊〕は傳崇福寺趾と其遺物、南滋賀の遺跡と遺物とを基本として文獻と相俟ち其の論述を進めてゐるものであり、注意すべき幾多の資料を發見されてゐる。此等の中、最も重要な資料をなす古瓦に就いて從來の奈良様式とする所説に疑を容れ、古瓦の様式に一轉化を試みんとされてゐる。この様式論の如何は扱き措き將來、着實なる古瓦研究の端緒を導く一因となるものであらう。「朝倉橋廣庭宮趾」〔島田寅次郎、

史蹟名勝天然記念物〕は筑紫國朝倉郡宮野村に凝する。「廢寺趾に於ける層塔の心礎」〔上田三平、歴史と地理〕にて山田寺〔美濃〕瑞龍寺〔岐阜〕飛驒國分寺、甲斐國分寺、石見泰林寺趾、淡路國分寺趾、奈良市元興寺等の各心礎を基本的に調査されてゐる「法起寺伽藍に就いて」〔石田茂作、考古學雜誌〕「奈良時代の寺院組織に就て」〔同人、三宅博士古稀祝賀記念論文集〕の後者は寺院建立の位置伽藍建築物の種類と其の性質、伽藍配置、寺院の仕事と生活、寺院行政と寺院經濟、寺院相互及宗派との關係に分ちて論述されてゐる。奈良朝に於ける寺院約四百個寺の綜合的見解とも稱すべく、當代の寺趾考察に資するものである。「葛野郡西院所在の礎石」〔京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第十冊〕「成就寺及び附近出土の古瓦に就て」〔古住芳彦、歴史と地理〕に大阪府三島郡五領寺出土のもの、平安期の窯趾でなからうかこしてゐる。「四天王寺出土の左寺瓦」〔大脇正一、同誌〕あり、經塚關係として「防長和鏡の研究」〔弘津史文著〕「播磨杉ノ内カナ塚發掘鏡」〔太田陸郎、考古學雜誌〕「愛宕郡花背村の經塚」

(京都府史蹟調査報告第十冊)等が見える。板碑に「續下野國板碑表」(丸山瓦全、史蹟名勝天然記念物)に三百三十三例を挙げ「俱利加羅不動の板碑」(三輪善之助、同誌)

は埼玉縣北葛城町觀音寺所在の鎌倉期と推定するもの、

石造物として「箱根山の磨崖石佛」(石造塔婆) (跡部直治

同誌)金石には「大和田原古金石文の二三」(高田十郎、考

古學雜誌)等散見に止まる。「勝生の銘を有する骨藏器に

就て」(宮坂光次、史前學雜誌)茨城縣行方郡現原村出土

の墨書銘あるものにて、必しも其の姓氏を示すものでな

いとする。以上の外、各府縣の史蹟調査報告(東京、京

都、靜岡、兵庫、宮崎、島根)乃至下野、備後、伊豫、

筑紫、土佐の各史談上毛及上毛人、上代文化史蹟ミ古美

術、武藏野、信濃考古學會誌等に各時代に互りて、夫れ

ゝの地方のものが記述されてゐるが、遺憾ながら一切

を省略する。尙ほ當代に關し、造形美術を對象として論

述するものが多あり、佛教美術、東洋美術、寧樂、國

華等に載するものであるが、「正倉院御物年表」其の解

説(石田茂作、考古學雜誌)「正倉院御物兵器に就いて」

(關係之助、寧樂)「正倉院の三彩陶器に就いて」(奥田誠一、同誌)「法隆寺金堂の四天王像」(濱田耕作、東洋美術)等二三の題目を學けるに止めて置く。

朝鮮半島の考古學的調査を見るに朝鮮總督府史蹟調査

のみに北鮮に雄基貝塚(咸鏡北道雄基面)の發見ありて

土器、石器の外當代人々骨數體を發掘され兩鮮慶州では

瑞鳳塚の一半を調査せられ、種々の資料を發見されてゐ

る。論述では平安南道大同郡大寶面反川里出土の「新發見

の細線鋸齒文樣鏡に就いて」(高橋健自、考古學雜誌)「多

鈕細紋鏡の一新例」(森本六爾、考古學研究)あり、この

特殊なる遺物が更に二例を加へ、西伯利亞(一)朝鮮(二)

長門、大和、河内(各一)を數ふるに至つた。青銅遺物の

研究として將來に残されてゐる主要なるものである。「漢

代の木棺に就いて」(原田淑人、考古學雜誌)に主として

樂浪王肝墓のものを文獻に徴して棺の性質を説く。「沙器

所の窯跡」(鮎貝房之進、朝鮮)「鷄龍山麓陶窯趾調査報告」

(野守健、神田惣藏、朝鮮總督府古蹟調査報告)は共に忠

清南道公州郡反浦面發見の陶窯趾であつて、後者に於て

は從來高麗末期にせられて居つたものが明に李朝に屬するものゝあることを指摘し、附するに現時の陶窯を示し朝鮮陶窯の研究に一步を進めるものがある。「硬化法を用ひて修理せる浮石寺の壁畫」(近重眞澄、史林)に硬化法の成績を叙し、「高句麗式」思はるゝ、義山里石塔」(大原利武、朝鮮)は平安南道龍岡面にあり、從來新羅統一時代のものゝされるもの、以上の外、「樂浪古墳發掘の漢時代の人骨、齒、頭髮」(清野謙次、金關丈夫、平井隆、民族)に王肝墓出土の人骨を測定するもの、「歐米の博物館と朝鮮」(藤田亮策、朝鮮)、又た啓示する處が多い。昨年朝鮮に於いては治政二十五周年の記念博覽會開催さるゝと共に大邱に於て新羅藝術品展覽會ありて、石器、金石、三國、新羅統一の各代に互り頗る見るべき資料に接するものがあつた。

滿洲方面では「貔子窩」(濱田耕作、東方考古學發刊第一冊)の業績を見るに至つた。彩色土器を出せる單陀子瓦甃等を出せる高麗塞の遺跡は元より南滿洲に存在する一遺跡に過ぎなからうが、各種の石器を伴ふ石器時代か

ら銅鐵鐵器等の金屬器乃至泉貨等の周末漢初に互る支那本國との文化的交渉を語り單色土器の基本的調査は此種土器研究の提要をなすものである。蓋し「貔子窩」は本邦考古學界昭和の躍進の尖端をなすものとして更に意義づけられるものゝ云へる。「旅順石塚發見土器の種類に就いて」(同人、人類學雜誌)は白色土器と卵殻陶器の存在を明にし、前者は殷墟のそれと關聯せしめ、支那本土の輸入とし、後者も又た製作時代は降るも同じく輸入品であらうとする。「西伯利亞から滿蒙へ」(鳥居龍藏著)は調査紀行であるが、鞍山苗圃墓群の發掘乃至シベリア發見の繩紋土器等舉ぐべく、就中後者は本邦の繩紋土器系統に多大の示唆をなすものである。シベリア沿海州出土の細線鋸齒鏡は「極東シベリア發見の銅劍と銅鏡」(同人、考古學研究)として詳述されてゐる。滿洲に於ける發掘調査は貔子窩以降毎歲、遂行せられてゐるが、昨年は關東廳のものに旅順管内方家屯會尹家屯に於ける漢代塚墓七基の發掘調査を完了さるゝものがあつた。

更らに眼を支那本土に轉するに河南省彰德府殷墟に

於て外人により組織的發掘さるゝものがあつた。「殷墟發見の大石磬」(濱田耕作、三宅博士古稀祝賀記念論文集)は幅二尺、高一尺の斜三角形をなすものであつて、其の發生に就いて同所出土の石庖丁に半月形乃至頭部の大きな鯨頭形の存在から導き、周代に既に雷磬琥磬の存在に徴して、この斜三角形三角形は斯様な石庖丁を撃つて音を發せしめるに云ふ磬の祖形を考へられないであらうかとする。「甘肅省出土に傳ふる一彩文土器に就いて」(矢島恭介、考古學雜誌)東京帝室博物館收藏の該土器を基として紹介するもの、「先秦時代の支那に於ける西方文明の影響」(アンリ・マスベロ、史學雜誌)は支那古代文化の發達を考究する處ありて、支那文化に最も濃厚な影響を受けたのは紀元前四世紀頃にかけて西方文化を採用してゐる北方民族の東漸と接觸したるにこそであつて、所謂スキタイ式が支那藝術の刺戟となり、他方イラン文化は印度を介し、中亞細亞を経て支那本土に入り、此の兩者の合流がほゞ秦代に形づくられ、前者は武器類等の主として物質方面に後者は思想、學術方面に及す處の大いものが

あり、漢代以前に東漸した外來文化との交渉を高調するものである。「漢代藝術に於ける雷文」(榎本龜生、歴史と地理)はロフトチエフ氏の一文を譯し、「山東省監濶出土の瓦製戰車」(原田淑人、三宅博士古稀祝賀記念論文集)「支那陶磁の時代的研究」(上田恭輔著)「歐米で觀た佛像を表はした三面の古鏡」(梅原末治、佛教美術)の最後は其の數の甚だ少いものであり、之れは六朝代に盛行した佛教が未だ深く鏡背紋様に影響する所の少かつたことを意味するものであらうとする。尙ほ「支那建築に於ける臺殿の發達」(奥村伊九良、佛教美術)等の外、石佛に「魏多時代彫像の起源と其特徵」(松本文三郎、佛教美術)は印度に於ける主要なる當代の彫刻に就いて論述され「アフガニスタンの佛頭」(濱田耕作、同誌)はハツダ發見の二小佛頭につき説述し、西紀三四世の希臘美術の影響を示し、ガンダラのそれと比し興味ある見解を提供されてゐる。「考古學上より見たる東亞文明の黎明」(濱田耕作、歴史と地理)は東亞の舊石器時代、支那の新石器時代と其の人種問題、彩畫土器と西方文化との關係、殷墟の遺

物ミ金石併用期、支那青銅器文化の極盛期、鐵器の使用ミ所謂秦式の藝術、所謂スキート文化ミ其影響、漢代の文化、漢代の文化の東漸ミ滿洲北鮮、南朝鮮ミ西日本に於ける支那文化、原始日本等互般なる範圍を包括して論述され、將に昭和初頭に於ける本邦考古學界の清算を見るもの云つて過言ではなからう。

最後に吾が考古學界に種々の業績をのこされた文學博士高橋健自氏の長逝を悼み筆を擱く。〔島田〕

地理學界

昭和四年度に於ける我が地理學界は來るべき斯界の大發展を豫想せしむる準備期ミ云ふべく、此の種活躍が色々形に於て表れたことは否むことが出来ない。蓋し本邦の地理學界は近年著しき活氣を呈し長足の發展をなして來たが、一度び之を歐米諸國のそれに比するべき劣れることの甚だしきは、恐らく他の諸學科に其の類を見ない所であると言つても敢て過言ではあるまい。これ一は斯學の研究に専念する學者の數の寥々たるにもよるが社會の地理學に對する關心の少なかつたことも亦爭はれ

ない事實である。昨年度に於ける地理學界が所謂大衆時代の潮流に棹して一般民衆に平易に斯學を示し其の關心を示唆せんとした努力は斯界の黎明期に於ける我が國に於ては蓋し適切なる活動ミ云へよう。

此の種活動の萌芽も見るべき世界地理風俗大系は一昨年來月々其の刊行を續け漸く其の大半を完了したが、昨年度に於て更に空前の事業ミして期せずして新光・改造の兩出版社より日本地理大系が刊行さるゝに至つた。我が國の比較的詳細なる地誌は既に明治の末期に於て山崎、佐藤兩氏により大日本地誌十卷が成つたが、其の後人文の發達は誠に急激なるものがあり、將に新地誌の出現すべき機運が熟しつゝあつた。爰に兩出版社の努力により昨年度に於て一は東海、東北篇を、他は近畿、關東篇を夫々發刊するに至つた。されき餘りに通俗に墮した、め吾人の期待が大きかつたゞけに甚だ物足りぬ感を抱かせたことは恨むべき限りであるが、目的が目的であるだけまた已むを得ぬ處であらう。

學術的刊行書に於ても亦此の傾向ありしことは明かに

看取され得る處である。先づ自然地理の方面に於ては、高橋純一博士の「自然地理通論」は一昨年に出た第一卷に續いて第二・第三卷を出し、本邦に於ける自然地理通論の最も詳細なるものを得たことは眞に欣懐に堪へない。卷を追ふに従ひ例を本邦に採り著者の考説のみならずまた本邦學界に於ける學説の粹を集めて以て其の完全を期してゐる。而して立正大學に於ける講義を編める「自然地理學の基礎的知識」(淺井治平)を始め特殊なものには「世界構造地理學要論」(楠田鎮雄)、「世界地貌學要論」(楠田鎮雄)、「數理地理學」(北田宏藏)も可及的平易に斯學を示さんとしたものであり、「日本地形誌」(辻村太郎)は東京帝國大學地理學部地理學專攻學生になせる講義案を編めるものにして我が國の特種地形を明にせるもの、「地形學原論」(香川幹二)は地形學を初學者に最も平易に示さんとしたものであつて何れも亦此の傾向を示せるものである。翻つて専門雜誌等により昨年度に於ける本邦地理學界の研究が如何なる方面に進展しつゝ、あつたかを概觀するに、先づ自然地理に於ては、引續く大震の示唆により其の

研究に異常な緊張を加へ來つた地殼運動に關するものは本年に於ても昨年と同様多くの論説が現はれた。潮汐の負荷に因る地塊の傾斜運動(高橋龍太郎)地震は、地震の際又は後のみならず地震前に於ても普通に考へらるゝ、至極緩慢な變動の外に吾々人間に其の變動を感知し觀測し得べき程度の稍急激な地殼運動もあつて然るべきである。この見地から、地殼の比較的長年に亙る傾斜運動を調査する目的で三崎油壺なる東京帝國大學の臨海實驗所内に石本式の傾斜計を設置し昭和三年八月中觀測せる報告である。然るに設置後數日にして此の傾斜計の設置されてある所の地殼が潮汐の干満による傾斜運動を著しく示すことが判明し、猶地殼は上述の如き變動の他に極短週期の運動をもなし得ることを示した。斯様の傾斜計の變化を起すべき原因は結局海水の潮汐による負荷の變化により起る地殼の變曲にありきなし、潮汐による地殼の傾斜變化を調べ、其の傾斜變化量の狀況、有效剛性を表す曲線の形狀等より地殼の構造、彈性的性質を明かにせんとする一を試みであつて、牽いて地震豫知問題の解決に資せ

んこするものである。「紀伊半島に於ける慢性的並に急性の地形の變動に就いて」(今村明恒、同誌)は、近畿南部地方に於ける地震活動の周期より次の活動に入る時期を捉へんこするものである。即ち外帯地帯を南北に切れる紀州南端串本から大阪北方吹田に至る水準線路の測量の結果、紀伊水道の兩側に於ける地動觀測網による觀測結果より、地塊の慢性的傾斜運動の特徴が半島南端では南下りであり中央部は膨れ上りであり大阪灣に沿へる地塊は次第に沈下を促されたるを見、此の變動の窮極する所は急性的地形變動の形式を追ふであらうこ想像し、此の場合に於ては破綻の箇所が南方一、二百軒の沖合海底なるべく、地塊が概して上手をこつて更に沖合に幾分の進出をなすここ、歪力の開放に伴ふ地塊物質の膨脹この爲に、半島の地塊がシーソー的運動をなすこ最近の關東大地震に於て經驗せられた通りであるべき筈であるこ決論してゐる。而して更に内陸地方に於ける地塊の傾斜運動を段丘の侵蝕型態を詳細に調査し土地の隆起傾斜運動より見んこするものに「桂川―相模川段丘の地塊運動」

(東木龍七、地學雜誌「鑄川及び碓氷川の段丘の地塊運動」(東木龍七、同誌)がある。即ち關東山塊の南北兩界に於ける研究にして、該河川の侵蝕狀態より段丘地域の傾斜運動の關東山塊の相關々係を見てゐるものである。「河岸段丘の非對稱的配置の成因」(東木龍七、地理學評論)は更に豊富なる全國的の例證を以て侵蝕面によつて地殼運動を知る基礎にせんこするもの、「紀州鬼ヶ城に於ける土地隆起現象」(脇水鐵五郎、地學雜誌)は木本町海岸なる鬼ヶ城岬角の隆起段丘の地形を土地の間歇的突然隆起によるものこし且つ大地震に伴つたものこしてゐる。

如斯き地殼變動の表現である地震に關する研究も數多くあつたが、吾人の最も喜ぶべきここは斯學の研究が次第に地震豫知の方面に向けられつゝあるここ、及び如何にして震災を軽減せんかの問題に向へるこここれである先づ「地震の原因に就いて」(石本巳四雄、東洋學藝雜誌)は日本に出現した大地震及び之に附隨して地表に現はれた地形變動の詳密な調査より、地震は土地の隆起現象に基づくものにして結局地殼下に横はる岩漿の運動によるこせ

るもの、「地震に伴つた地形變動に就いて」(小平孝雄、地震)は、これ迄の日本の地震に伴つて起つた地形變動を見て地震前に多少なりとも地形變動の行はれてゐることを指摘し、此の漸進的の變化を觀測することが出来るならば、大地震の豫知の如きは差程に困難でないと思へるもの、「地震の發生に氣壓勾配との關係」(井上、同誌)は氣壓勾配が地震の副原因として働ける様子を調べんとし、大勢から見て地震前の氣壓勾配の主な向きは其の地方に存在する地震帯群或は斷層群の主な方向に直角であり、地震に氣壓勾配との關係から得た地域の境が偶然に現れたものでなく實在性のあること、震源の地理的分布に氣壓勾配の長週期變化の影響ありとせるもの、「關東並に近畿地方に於ける地震活動の循環」(大震前の諸現象)に就いて」(今村明恒、同誌)は關東に於ける非局部的大地震は同地塊の大傾斜運動であり、局部大地震は一二のモザイク地塊の運動によりて起るこの見地より過去大地震の經過を見地震活動の循環を窺ひ、其の活動循環の法則及び傾斜運動進行の特徴を知りて次の活動狀況を研究せんとし、

同様の考察を更に舞臺の廣き近畿地方に行へるもの、「關東地方の地震活動に對する一見解」(那須信治、同誌)は、關東地方に於ける地震活動の盛な理由の一是該地方が奥羽中部兩地方の二直線形の地形に挟まれた所謂接合點たる地形の影響によるものであり、且つ本州島弧の中心にあたり折目にあつてゐるから割目に相當する地震帯が關東地方では他地方に比較すれば複雑な配列を示してゐると思へるもの、「地震に對して武裝されたる町村」(武裝なき町村) (今村明恒、同誌)は震災防止の第一義は吾人の町村を耐震構造を以て武裝することにありとの見地より、これ迄震災を被りし地の民家例へば肥前島原の石積み土臺、但馬北部の間柱抜き町屋、丹後地方の頭重二階建の如き地方的色彩が何れも耐震的たらざりしを説明し、和歌山縣下の強風に對する地方色たる概して低き耐風家は堅固なることを旨とするのでこれ即ち耐震家屋に近きものにして、若し之に配するに大阪市に於けるが如き耐震的小學校建築を以てせば震災防止の第一義に近きものたらんと思へるものである。

六月十七日突如として起つた北海道渡島國駒ヶ岳火山の噴火に關する研究は、實に昨年度に於ける自然地理學界を飾つたトピックであつた。各大學、研究所から逸早く調査隊が派遣され其の報告が各専門誌上を賑し、火山に關する研究の進歩に貢獻した所少しせせない。駒ヶ岳火山の噴火〔多田文男、坪井忠二、岸上冬彦、高橋龍太郎、津屋弘達、中田金市、東洋學藝雜誌〕は、地震研究所より派遣された一行の調査報告であつて、地形地質並に噴火現象に關しては多田・津屋、微動計觀測に就いては岸上傾斜計觀測に就いては高橋、重力偏差計觀測及び水準測量に就いては坪井、噴火に伴ふ電氣現象に就いては中田各氏の執筆にかゝるものである。今回の噴火は主として中央の摺鉢火口に於て行はれ、噴火力は南東の方向に向ひ灰白色の軽石並に火山灰を降らせ留湯・鹿部に災害を與へた。而して今回の噴火で最も著しい現象は多量の熔岩が噴出して山側に押出した、め火口附近の状態にも變化を來し、馬ノ背駒ノ背等の鞍部は從來鋭い尾根であつたが厚く熔岩に蔽はれて平坦となり火口内の地形を單調な

らしめ、また尾根に沿ふて深い裂罅が無數に通り内部の淡赤色の熔岩を露出するに至らしめたことである。東北帝國大學も機關誌岩石礦物礦床學九月號を駒ヶ岳火山號とし「爆發當時の情報」(神津、渡邊)「爆發後の状態、噴出物の野外的分類及び其の分布」(渡邊、吉木)「噴出物の化學的性質」(瀬戸、八木)「噴出物の温度」(益田、渡邊)「噴出物の平面積」(上田)「爆發前後の大沼湖水面の變化」(渡邊)に就いて報告し、別に「駒ヶ岳爆發による火口附近の高距の變化」(渡邊萬次郎、同誌)の報告あり、「駒ヶ岳噴火」(國富信一、氣象要覽)は氣象臺より派遣されたる調査隊の報告であり、最初より同地附近にあつて觀測せる函館測候所長根本廣紀氏は「駒ヶ岳爆發調査概況」を氣象要覽に載せ、商工省地質調査所より出張せる赤木健技師は二十日間互に詳細なる調査を、昭和四年六月に於ける駒ヶ岳火山の噴火に就いて「」題して地學雜誌に報告してゐる。此の他「駒ヶ岳噴火調査」(岸上冬彦、地震)「駒ヶ岳火山と爆發」(田上政敏、地理教育)「北海道駒ヶ岳爆發見聞記」(吉澤甫・笹倉正夫、地球)等の諸調査報告があり、「駒ヶ岳爆

發の機制〔本間不二男、同誌〕は、去る六月の駒ヶ岳の火山活動は爆發相に屬しプリニウス式活動に當り、岩漿内にある揮發分の非常なる張力を得て沸騰し出せりとするものである。〔阿蘇火山活動の現状〕〔田中館秀三、地學雜誌〕は、昭和三年九月に於ける活動以後の阿蘇火山の状況を説明せるもの。〔淺間山昭和四年九月の爆發に就いて〕〔八木貞助・中條正勝同誌〕は昭和四年九月十八日未明に於ける淺間山爆發の状況を述べ遡つて活動の歴史を見、近時に於ける噴出物及び其の分布を説明し此度の活動の機構に及べるものにして、温泉に就いては、長野縣地獄谷噴泉に就いて〔八木貞助、地球〕等の研究あるのみであつた。而して此等研究の根底に横はれる問題たる地帶構造、地質構造に關しては、枝葉に咲いた花の絢爛たりしに比して頗る見劣れる感があつた。唯數年來世に問はれた小川琢治博士の地質現象の解釋に對する獨創的研究の結果が集成されて「地質現象の新解釋」三題し浩瀚なる書籍となつて發刊されたことは、吾等地學を愛好する徒には喜ばしき限りであつた。内容に就いては其の都度に紹介があ

つたから省略する。〔東亞地域の概観〕〔小川琢治、地球〕は吾等の生活する環境たる東亞地域に就き人文現象と同時にまた地文状態をも明にせるもの。〔知多半島の地形及地質〕〔小瀬知常、地學雜誌〕は知多半島の地形及び地質状態を明にし進んで地質構造に言及せんとするもの。〔名勝三段峽〕〔吉野益見、同誌〕は廣島縣下太田川上流なる三段峽附近の地質及び地形を紹介せるものである。

次に地形學の方面にあつては、〔阿武隈山地の化石準平原に就いて〕〔望月勝海、地球〕は、福島縣石城郡、東白川郡、茨城縣多賀郡、久慈郡の相交る阿武隈山地に於て保存さる、準平原が陸地で行はれしを述べ、其の成立の意義を明にせるもの。〔越前城崎村地方の地形とその發達に就いて〕〔市川渡、地理學評論〕は、越前城崎村附近の特異なる海岸地形より此の地の少くも三回は隆起したることを述べ、此の地方の海岸は若狹リアス海岸形成の當時既に現在の海岸地形の大體の輪廓は形成されたものとし、其の後の第二次的變動として地殼の隆起斷層運動沈降作用等に依る複雑なる變化が順次行はれ現在の地貌を呈する

に至れりせせるもの、「甲斐國地藏鳳凰山下の逆斷層」(岡山俊雄、同誌)は上蔦木附近に於ける駒ヶ岳斷層崖の走向急變と藪の湯より小武川上流に至る一線を駒ヶ岳斷層崖南部の延長とし、切峯面形態との關係よりこの部分に逆斷層の存在を明にせるもの、「鹽原火山東斜面及び鹽原盆地に發達する段丘に就いて」(田山利三郎、同誌)は鹽原火山前地及び鹽原盆地の階段狀地形を説明し其の形成の時代に及べるものである。

轉じて氣候學の方面に於ては、「北海道の氣候學的研究」(福井英一郎、地理學評論)は北海道に於ける氣温の分布及び降水量を説明し、米作との關係を探究し、本地方の氣候區を設定せるもの、「臺灣の氣候」(神保六合男、地球)は臺灣に於ける氣温、氣壓、及び風、濕度、降雨の狀態を説明せるもの、「劍澤の萬年雪」(今西錦司、同誌)は日本アルプス中最も殘雪の多き劍澤に於ける殘雪縮小の最極限に達せる晩秋の觀察報告で嘗て論議されし氷河問題に言及せるものにして、氣象に關しては「極東の颱風に就いて」(堀口由巳、東洋學藝雜誌)の研究がある。之は歐洲に於

けるビヤークネスの有名な低氣壓を説明する説が颱風等の如く熱帶の地に發生するものにも應用し得るや否やの疑問を解かんせせるもので、大正十三年八月中旬約十日間沖繩列島の周圍を彷徨した沖繩颱風を詳細に調べ、其の結果として得られた氣象要素の分布を見、他の幾つかの颱風についての氣温及び雨量を調べ、沖繩颱風に於ては歐洲學者の主張たる不連續線が見出されず、颱風としては不連續線を持たないのが本原の性質であり、颱風はその降雨の原因及びエナジーの源に於て熱帶外低氣壓とは全く異なり特殊の構造を有せしめてゐる。

湖沼學の方面に於ては、「湖水中の酸素含量及水素イオン濃度の水平分布に就いて」(吉村信吉、地理學評論)は、青木湖、中綱湖、木崎湖、野尻湖、北浦、手賀沼、石神井池、高須賀沼に行へる化學成分の水平分布の觀測を報告せるもの、「鳥取縣多鯨ヶ池の湖沼學的豫察研究」(吉村信吉、同誌)は該湖の理學的性質特にその水平分布を明にせるもの、「停滯期に於ける富榮養湖の水素イオン濃度の垂直分布」(宮地直三郎、地球)等の如き化學的研究が盛で

あつた。〔村松〕

人文地理 本年の人文地理學界の業績としては、例年よりも地理學に關する書籍が比較的多數に出版されたことを特記せねばならぬ。佛國の大家ブリュンヌの「人文地理學」(松尾俊郎譯)が出版されると共に「人文地理學講義」(西龜正夫著)の如きものや、「世界地理發見史」(エドワード・ヘーウッド著、細井一六譯)の外に「世界歴史地理研究續集」(小川琢治著)の大冊が出で、「世界地理行脚」(寺田貞次著)「日本の自然と人文」(西田卯八著)の如き小品も亦相當の賣行をみせた。

繼つて昨年度に於て學界に主として取り扱はれた題目は、考へてみるに、地理區に關する論文をはじめ、居住地理學、經濟地理學、歴史地理、戰略地理、都市研究、地割、人口問題、政治地理など、學徒の注意に上つたこと見えて、いづれも二三篇乃至數篇の論著を見せてゐる。乞ふ序を追うて其梗概を語らしめよ。

地理區に關しては「ヘットナーの地理學的方法論及地表區分」(綿貫勇彦、地理學評論)、「文化景觀の理論的

研究」(保柳睦美、同誌)、「世界の地理區」(神田逸二、地理教育)「地域と國と世界」(小田内通敏、同誌)などがあつて、ハーバートソンやマッキンダーなごの地理區の取扱方をのべてあるが、さうした考方を日本に應用せんとしたものに「日本經濟區について」(富士徳治郎、同誌)がある、以上何れも理論的研究である。「八ヶ岳山麓に於ける景觀型」(三澤勝衛、地理學評論)は一步を、めて、この地方の自然的條件から導れた、聚落耕地、舊草野地、純草生地、疎林地、森林地がいかにかに人文的に利用されるかを明にしたものである。「秋田縣の地理區」(柴田良一、地理教材研究)もやはり秋田縣を限つての地理區について説明がしてある。

歴史地理に關しては「毛皮と歴史」(石橋榮達、歴史地理)は人類が毛皮を需用する歴史の必然性から、その産地の探檢史に觸れ、蝦夷の説明乃至は日本の古地圖についての説明がある。「クツクの第三次探檢船の日本通過」(秋岡武次郎、地理學評論)も亦その探檢の結果によつた地圖を、その以前の地圖が日本をいかに記してゐる

るかをのべて、前者を参照すべき面白味をしめしてゐる。「東亞地域の概観」(小川琢治、地球)は主として漠北の古代民族に及んでゐる。之を「日本文明の黎明」(濱田耕作史學雜誌)と併せ讀んで、そこに何等か日本と漠北とのつながりを教へられる。「大阪平野の發達」(伏見義夫、地理教育)は淀川大和川平野の變化を史上にさぐつたものであり、「丹波に於ける古代人の生活」(藤田元春、地球)は有史以後、丹波高原に於ける、漁業生活、狩獵生活、牧畜生活、森林生活、農業生活、鑛業生活等から、いかに現代の民人生活が導かれてゐるか、現存せる生活の中に、まれ程古代の面影が残つてゐるか、文化階級の發展はさうかゞ云ふ事を論じたものである。「戰爭の地理學的考察」(小川琢治、地球)は長篇の大論文で未完であるが、戰爭といふ人類活動の現象が環境いかに關係するかをのべ、歴史上の大戰の跡を考察批評せんとする試みである。

●**地割**に關しては「尺度綜考」(藤田元春)の出版が注目される。これは尺度、里程、地割及都城の四考を集めたも

のである。この書が備をなしたのではないが、「埴科郡下の條里」(高野豐文、地球)が、珍らしく信濃、千曲川犀川流域に残る條里をのべ、且曲尺によつてゐることを明にした。同時に「岐阜縣下の條里」(阿部榮太郎、史蹟調査報告)も、同様に曲尺が用ひられてゐることを報告してゐる。

●**居住地理**の方面では「江南の民家」(藤田元春、史林)は江南の民屋の景觀と、江北の民屋のちがう地理的理由をのべ、轉じて、草葺四阿、瓦舎の構架、江南の山村等の實際をしめして、我日本の聚落景との類似を明にしたもの、「隱岐島前の牧畑及組織の持續」(石田龍太郎、地理學評論)は、この狭い國に、何故にそれが永續するかといふ過程に考察をむけてあるが、其發生した歴史的原因には入つてゐない。「伯林懷古」(阪倉篤太郎、史林)は獨逸伯林の中に残つてゐる古い居住や建物の現狀をのべ、「獨逸の居住形態」(佐藤弘、地理學評論)は更に獨逸全般にわたつての居住型をのべ、「アルゼリー」に於ける土人の居構(田中阿須麿、地理教育)はかうした乾燥地の狀

況を明にし、「東京市近郊に於ける土地利用」(西水致郎地理學評論)は東京近郊農村の地域を、都市が段々侵蝕してゆくと共に、其居住形態の變化する過程をのべてある。

都市の研究では、「支那の都市」其二大種類(西山榮次、地理教育)は支那の城の起源と其發達、鎮と商業都市との解説であり、「宿場町の研究」(佐々木清治、地理教材研究)は、我國に於ける宿場町の發達と驛路との關係をのべ、種類を本宿、間の宿、山麓、河岸、關所等にわかち、交通路の變化に伴ふて宿場の移轉した實例を三河の吉田についてのべた、「南支那の交通」(西龜正夫、地球)は上海や南京、漢口等の新しい支那の都市の道路を説明したもので、「都市地理研究」(人文地理學報第一輯)は其名の示すごとく、主として都市を論じ、風景形態としての都市(小田内通敏)をはじめ濱松市(佐々木清治)、中世關東の都市(鳥羽正雄)、近世大阪(佐古慶三)、大都市の地盤(江畑弘毅)、米の集數と都市(川口丈夫)などがあつてある。

支那に關しては既に上述した論文の外に「支那古代に於ける中央アジアの交通路」(小川琢治、地學雜誌)「支那の農民離村について」(田中忠夫、滿蒙)「氣候變遷と蒙古」(丹桂之助、地理教育)「呼倫貝爾に於ける各種族の分布及産業」(西山榮久、同誌)「西藏の土地と住民」(藤田元春、地球)等がある。

政治地理に關しては、第一に「人文地理學の一科としての政治地理學」(小川琢治、地球)を挙げねばならぬ。本論文は國別の地誌とは獨立に、政治地理學の必要を明にし、其對象を國家であることのべた。「世界法律地圖」(下村彦一、地理學評論)はウキグモアの地圖の紹介ではあるが、その分類は面白い。「強國の概念と現代諸強國」(飯本信之、地理教育)は、強國の意義をのべ、英と米を以て強國とし、日、佛、獨、伊を局地強國とし、露國を阻止された強國であることのべ、濠州や南阿やアルゼンチンを強國の萌芽とみき、「戰後フランスの大觀」(町田梓樓同誌)「北米合衆國に於ける人種問題」(山田芳太郎、同誌)「列強の空中國防」(神谷正男、同誌)等はいづれも地理教

育の現時の列強といふ特別號にのつたものである。最後に「政治學者の見たる國家」(小川琢治、地球)はチエレンの云ふ所によれば、國家は全く法律主體であるけれども、國家に地理的及人種的要素の重要であることを力説したものであつた。

經濟地理方面では其研究は多い。「ゴム生産とアメリカ合衆國」(佐々木彦一郎、地理學評論)は合衆國のゴムに對する努力をのべ、「歐洲大戰後に於ける世界交易の概觀」(玉城肇、地理教育)は米國の目醒しい發展振をこき「礦産上より見たる現時の列強」(渡邊萬次郎、同誌)「ソヴィエットロシヤの經濟政策」(淺野利三郎、同誌)「南アメリカ經濟地理」(下田禮佐、同誌)「ジャバの經濟地理」(田中館秀三、同誌)「カナダの地文——人文及礦産」(渡邊萬次郎、同誌)「棉花の經濟地理的研究」(佐々木彦一郎、地理學評論)「英國の産業」(遠藤金英、地理教育)等いづれも海外事情の紹介をみるべきものである。「蜜柑の生産地帯」(川口丈夫、地理學評論)は主として海流と蜜柑、土地の高度と蜜柑との關係を明にし、「經濟地理學の本質及

其内容に就ての私見」(田中秀作、地理教育)は經濟地理學の要目をのべたものである。

人口問題については、「吾國に於ける大都市と地方の死亡率に就て」(今井丈夫、地理學評論)は大都市の死亡率が地方よりも低いことは衛生状態がよいのみでなく、年齢別死亡率の低いものが、都市に集中するからだと論じ「我植民地に於ける内地人移民」(武見芳二、同誌)「我國の人口状態について」(長谷川新一、同誌)「長崎縣の人口分布」(森壽美衛、地球)などが見るべきものであつた。

最後に經濟地理講話、西洋又南洋などの著述に於て、我人文地理學界を裨益し、且指導者であつた山崎直方博士を失つたことは、何といても記録すべき、一大不幸であつたと思ふ。(藤田)